

調布ネットワーク

vol.
2025-2
Nov

特集

電気通信大学における 「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業 (J-PEAKS事業)」の取り組み

Unique &
Exciting



研究編

- 庄野 逸 大学院情報理工学研究科 情報学専攻
情報理工学域I類(情報系) 教授
- 村上 靖宜 大学院情報理工学研究科 情報・ネットワーク工学専攻
情報理工学域II類(融合系) 助教
- 遠藤 晋平 大学院情報理工学研究科 基盤理工学専攻
情報理工学域III類(理工系) 准教授

Unique &
Exciting



キャリア編

- 渡辺 修司 立命館大学映像学部教授、立命館大学ゲーム研究センター長
(1993年電子情報学科入学)
- 古林 利明 株式会社ガクファーム代表取締役
(1978年電子工学科入学)



道路側から見た
屋間のe-Nexus(イーネクス)棟

中庭から見た
夜間ライトアップされた
e-Nexus(イーネクス)棟



表紙説明

先進エネルギー技術の共創と進化を目指す研究拠点として、電気通信大学キャンパス東地区に新たな研究施設「共創進化型自立分散エネルギー・ネットワーク共創拠点 (Energy Co-creation Nexus、略称 e-Nexus (イーネクス) 棟)」が完成しました。最大の特徴として、ZEB (Net Zero Energy Building) Ready 認証を獲得しています。

電気通信大学同窓会
一般社団法人 **目黒会**



(目黒会公式サイト)

調布ネットワーク

vol.
2025-2
Nov

電気通信大学同窓会

一般社団法人 目黒会






Contents

特集

電気通信大学における
「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業
(J-PEAKS事業)」の取り組みSTF 2025 スマートテクノロジーフォーラム
AIが変える社会 ～挑むべき課題と描く未来～

- 20 開催報告 學術講演委員会委員長 上田 敏樹
- 21 世界と日本のAI規制・ガバナンス政策を巡る最近の動向 市川 類
- 22 AnimateとGenerate ―著作権の現在地― 福宮 あやの
- 23 初等中等教育における生成AIの活用 森本 康彦
- 24 ゲームAI研究の進化と展望 伊藤 毅志

Unique & Exciting

- 10  庄野逸研究室
研究編 匠の眼を機械に一画像×AIで社会の安心をつくる
研究編 庄野 逸
- 12  村上靖宜研究室
研究編 アンテナ・電波伝搬とメタマテリアルの研究
研究編 村上 靖宜
- 14  遠藤晋平研究室
研究編 量子の世界を数式やシミュレーションで解明する
研究編 遠藤 晋平
- 16  たかがゲーム、されどゲーム
キャリア編 渡辺 修司
- 18  この土地らしいワインを造りたい
キャリア編 古林 利明

- 5 第12回電気通信大学ホームカミングデー開催報告
- 8 支部総会報告
- 25 同窓会賞受賞者から在学生に 贈る言葉
トピックス 国際ロボット競技大会参加報告
- 26 目黒会×在学生 学会参加費助成支援
- 32 目黒会×在学生 学生サークル活動支援
- 34 目黒会グループ会のご案内
グループ会報告 梶本研究室同窓会
グループ会報告 ゴルフ部OB・OG会
グループ会報告 64E入学同窓会
- 38 会員活動紹介 お役立ち情報
- 40 メッセージ (近況報告)
- 41 メールアドレス登録のご案内／目黒会グループ会のご案内
- 42 トピックス 『桜・花火お祭り大賞』報告
- 45 会員サービスのご案内
- 46 電気通信大学同窓会賞候補者推薦のご案内
- 48 編集後記／会費納入のご案内
- 49 読者プレゼント

電気通信大学における 「地域中核・特色ある研究大学 強化促進事業(J-PEAKS事業)」 の取り組み

電気通信大学 副学長（研究力強化担当）

小池 卓二

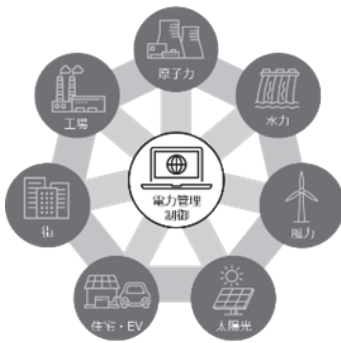
はじめに

日本の大学は今、新しい可能性を切り拓く時期を迎えています。急速に進む技術革新やグローバルな連携の拡大、そして多様な社会課題への対応が求められる中で、大学は地域と世界を結び未来をかたちづくる知の拠点として重要な役割を担っています。こうした動きを後押しするため文部科学省は2023年度より、「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS事業）」を開始しました。本事業は、地域に根ざしつつも世界水準の研究力を発揮し、持続的に発展する大学群を創出する取り組みです。電気通信大学では2021年より、「UECビジョン beyond 2020」のもと自らも共創進化スマート大学となることをビジョンとして掲げています。このビジョンの具現化を一層促進するためJ-PEAKS事業を通じて、経済発展と社会課題解決を両立しながら自律的に進化し続ける「共創進化スマート社会」の実現に挑んでいます。

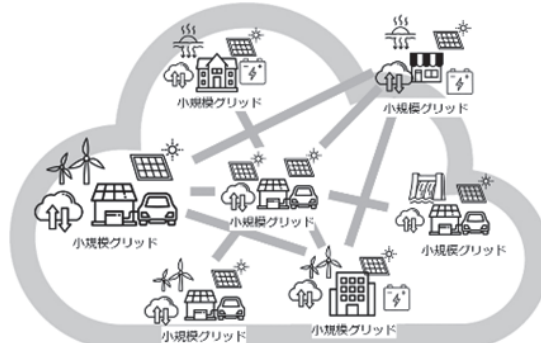
本学のJ-PEAKS事業は、東京農工大学と東京外国語大学との三大学の連携体制により、「西東京三大学から世界へ展開する食とエネルギーのサステイナブルイノベーション」をテーマに推進されています。農学・理工学・人文社会科学という異なる学術分野の強みを有機的に組み合わせ、分野横断的な課題の解決と国際的な研究展開を同時に進めるこのモデルは、全国でも先進的な事例といえます。

本稿では、「共創進化スマート社会」のビ

ジョンのもと推進されている本学のJ-PEAKS事業での取り組みについてご紹介します。



スマートグリッド社会



インターネット型エネルギー社会

従来のスマートグリッド社会とインターネット型エネルギー社会の概念比較図



東3号館外部階段に設置された
円筒形太陽電池の大規模実証設備

共創進化する先進エネルギー技術の創造

本学と、東京農工大学と東京外国語大学の三大学によるJ-PEAKS事業は農学・工学・情報学・人文社会科学等の多分野が連携し、グローバルな課題に対して、文理融合型の解決策を提示するという目的を持っています。三大学がそれぞれの強みを相互補完的に活かしながら「食」「エネルギー」「信頼」を主軸とする社会課題に対し、それらを持続的に支える仕組みづくりの実現を目指すものです。

本学が推進する研究主題を、「先進基礎科学技術の統合と実践により共創進化する先進エネルギー技術の創造」と定めています。具体的には、世界各国、特にグローバルサウスと呼ばれるアフリカなどの新興国の事情に応じて柔軟に

広く展開でき、災害などにも強い社会の土台となる社会基盤を形成するエネルギー関連研究です。

本研究では、再生可能エネルギーを指向する複数の自立分散型エネルギーを相互につなぎ合わせ、柔軟性とレジリエンスを兼ね備えた次世代型のエネルギー・ネットワークを構築することを目指しています。そこでは、従来の集中型アプローチから、「個人や地域の地産地消」を単位とする「インターネット型エネルギー社会」へと社会構造が転換し、人間が長い歴史の中で培ってきた知恵、人工知能やAIなどの機械による知能、さらに自然が本来持つ摂理や法則が有機的に融合することによって、固定観念に捉われない従来の常識を超えた新しいエネルギー

ギー活用社会が生まれます。

世界の中でも特にグローバルサウス地域は、文化や風習が先進国とは大きく異なる一方で、エネルギー消費の急速な拡大が予想されています。そこでは、世界的なカーボンニュートラルへの流れに乗って新しい社会システムが構築される潜在力が期待されます。こうした地域にこの研究成果を展開するためには、三大学が多様なステークホルダーと共に協力しながらELSI（倫理的・法的・社会的な課題）に十分配慮し、かつ汎用性と柔軟性を兼ね備えた共創進化型の自立分散エネルギー・ネットワークを実証することが不可欠です。従って、本研究はグローバルな社会課題解決に直結する基盤を提供するものであり、今後の国際的な研究展開においても極めて大きな意義を持つものです。

先進エネルギー技術の

共創と進化を目指す新たな研究拠点

先進エネルギー技術の共創と進化を目指す研究拠点として、本学キャンパス東地区に新たな研究施設「共創進化型自立分散エネルギー・ネットワーク共創拠点（Energy Co-creation Nexus、略称eNexus（イーネクス）棟）」が完成しました。eNexus棟は、延べ床面積1、535平方メートル、鉄骨造3階建ての施設で、バルコニーや屋上等の外部でも研究や実証実験を行うことができ、建物全体を最大限に活用できるような工夫を施しました。特徴の一つとして、ZEB Ready認証を獲得しています。

ZEBとは、「[Net Zero Energy Building]」を指します。その実現への段階としてのZEB Ready認証は、太陽光発電などの再生可能エネルギーを除き、建物で消費する年間の一次エネルギー量を省エネルギー技術により50%以上削減することに適合した建築物を指します。さらに本研究施設では、ICT/AIを活用したエネルギー管理システムが導入されます。既存の学内施設とNexus棟を結ぶことで、社会基盤プラットフォームとしての「共創進化型自立分散エネルギー・ネットワーク」の実証実験を行います。



ます。次世代の創電・給電・省エネのアイデアを実装して検証し、未来のエネルギーの姿を描きだしていきます。

そして、この研究拠点には、「エネルギーの持続性」という研究テーマを中核に据えつつ、情報、通信、AI、ネットワーク、量子科学、工学、医工、脳科学、宇宙など、本学で推進されている幅広く多岐にわたる研究テーマと活動が参集します。これらの多彩な研究活動を支える本研究拠点は、「エネルギーの持続性」と関連する研究開発・産学連携の結節点として次



の機能により構成されています。

まず、学内外の多様な方々にご利用いただけるコワーキングスペースとして、1階に「Nexus Park（ネクサスパーク）」を設けました。Nexus Parkは、本学の研究者やスタッフ、学生、企業の方々、そして卒業生や地域のみなさまとの交流スペースです。このスペースには、統合環境ソリューション事業を手掛ける企業からご寄付いただいた照明が設置されており、省エネと環境制御の最先端研究の場としても活用されます。2階と3階には、新たな共同研究やスタートアップの創出のための「共同研究実験室」を6部屋設けています。本学の多彩な研究と実証を核として、企業や地域の活動など、多様なステークホルダーのみなさまとの共創の場を提供してまいります。その活動の促進に向けて、西東京三大学共同で「戦略立案オフィス（URAセンター）」を整備しました。本オフィスは、研究プロジェクトの組成や社会課題解決を先導するナビゲーターとして機能します。企業や地域のみなさまからの研究開発や産学連携に関するご相談内容に応じて、柔軟にサポートいたします。研究開発や産学連携に関するご相談をお気軽にお寄せください。

次世代リーダーにむけた 戦略的拠点育成プログラム

本学のビジョンである「共創進化スマート社会」の実現を加速させ、これまでにご紹介した新たな研究拠点の理念を形にするために、新機

軸の活動として戦略的拠点を育成するプログラムである「UEC Strategic Hub Incubation Program (UEC-SHIP)」を立ち上げました。UEC-SHIPプログラムは、10年後の未来社会を見据え、本学の多彩な研究分野の力を相乗的に高め、多様で新しい国際的研究拠点や産学連携拠点を形成することを目標としています。その目標を達成するために、本プログラムには次のような特色があります。

本プログラムの特色の1つ目は、本学の異なる分野の研究者が3名以上で研究チームを組み、学際的な研究や新しい連携への挑戦に取り組む研究プロジェクトを単なる研究グループの支援ではなく、人やモノそして社会からの資本を呼び込む新たな研究拠点として育てる仕組みとすることです。2つ目の特色は、研究チームを組成する要件として、研究チームの代表は55歳以下、その代表のもとに集うメンバーには45歳以下の若手研究者を2名以上含めることが求められていることです。こうした「仕掛け」により、本学の若手の研究者が中心となって研究を推進し、次世代の研究リーダーを育てることを目指しています。本プログラムは学際的な研究の挑戦を育成するとともに、若手研究者が中心となって未来を切り拓く力を育む仕組みとなっています。

本プログラムの構想段階から、そのための運営チームが組成されました。この運営チームは、学長をはじめとする本学の運営を担当する幹部、各分野を代表する研究者、研究推進部門および

研究支援を専門に行うスタッフ (University Research Administrator、略称URA) という多様な立場にあるメンバーで構成され、学内の力を結集して、本プログラムの実現に向けて必要な事柄を着実に進めてまいりました。本プログラムの構想は、2025年3月にその歩みを始めました。運営チームは、「共創進化スマート社会」の理念を具現化するための構想を練り、その制度化に向けて幾度も議論を重ねました。こうして、大学全体の力を結集し、未来の科学技術や社会の発展に貢献する研究プロジェクトが生まれています。

UEC-SHIPプログラムを通じた次世代の研究リーダー育成により、未来の科学技術と社会の発展に貢献することを目指しています。今後、本プログラムにより推進されている研究プロジェクトの様子をみなさまにご紹介する機会があることでしよう。その際は、この挑戦的で意欲あふれる取り組みにぜひご注目いただき、応援をお願いいたします。

おわりに

電気通信大学は、J-PEAKS事業を原動力のひとつとして、「共創進化スマート社会」の実現に挑んでいます。ハード面では、先進エネルギー技術の共創と進化を目指す研究拠点となるeNexus棟の始動により、未来のエネルギーの姿を描きだしていきます。ソフト面では、次世代リーダーと共に戦略的拠点を育成するプログラム「UEC-SHIPプログラム」の立

ち上げにより、研究の起点を学内に生み出す仕掛けを作っています。このように、先進的な「空間」の整備と、未来を創る「人材」への投資を両輪とすることで、本学は地域と世界を結び、未来を切り拓く知の拠点としてその歩みを着実に進めています。これまでにご紹介した、先進エネルギー技術の研究、eNexus棟、UEC-SHIPプログラムをはじめとする取り組みでは、企業・自治体・地域社会、そして卒業生のみならず共に価値を創造する「共創型」の仕組みを志向しています。こうした活動を通じて、大学の知を中心に人と社会が結びつき、未来を支える新たな価値を社会へ届けていくことが、大学の使命です。

大学の進化は、学内の努力だけで成し遂げられるものではありません。本学で学び、社会で活躍されている卒業生のみならずの知見やネットワークこそが、次世代にとつての貴重な羅針盤となります。卒業生のみならずには、今後の本学の活動や取り組みに対して、変わらぬご理解とご支援を賜れば幸いです。

「共創進化」は、大学の枠を超えた社会全体の挑戦でもあります。電気通信大学のこれからの歩みにご注目いただき、みなさまにもぜひ未来を築くパートナーとして、共創進化の輪に加わっていただけますことを心より願っております。

第12回 電気通信大学ホームカミングデー 開催報告

第12回電気通信大学ホームカミングデーはオープンキャンパスとの同時開催で2025年7月20日(日)に新C棟を会場として開催され、125人の同窓生の参加をいただきました。歓迎講演会では学長講演、学術講演の聴講、グループ会交流の広場では活動紹介のプレゼンとポスターコンテスト、ウエルカムパーティーでは高額寄附者表彰、卒業周年記念品贈呈、目黒会支部自慢地酒コンテストなどを通して同窓生の交流を楽しんでいただきました。

●歓迎講演会

歓迎講演会はU・E・C奨学生の笠置さんの司会により13時50分から開始され、最初に主催者挨拶とあわせて田野電気通信大学長から講演をいただきました。

田野学長からは学長任期の最後の年のため大学中心ではなく大局的な話題について話がありました。大局的な話題としては、一つ目は我が国として近代国家への改革、Catchup型国家への改革を経て三つ目のInnovation型国家への改革が必要ではないかという話がありました。特にInnovation型国家への転換失敗により二流国になってしまったという話がありました。

この局面を打開するため、博士の活躍の場を

ボトムアップで飛躍的に拡大するシステムを構築する必要があるため、電通大がリーダーとなって14大学と連携して実施していく話がありました。

続いて今年のトピックスとしてキャンパスの施設更新が進んでいる話や、国際化を進めている話、情報I科目の入試への導入、CBTを用いた試験の導入などの話がありました。

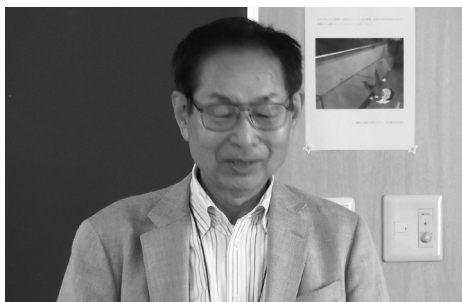
次に共催者挨拶として同窓会を代表して森目黒会長からは最初に目黒会の由来や歴史について話がありました。続けて会員構成や、就職支援の状況、目黒会活動としてのイベント・行事の充実、現役学生へのサービス拡大、同窓生へのサービス拡大、情報の共有化拡大の話があり



会場風景



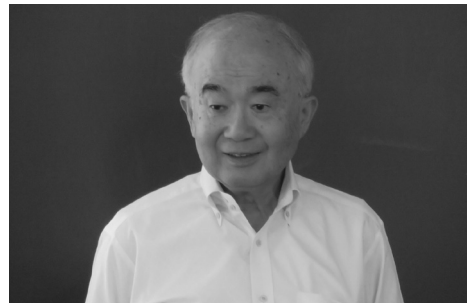
講演中の田野学長



講演中の森会長



講演中の曽我部先生



講演中の梶谷先生



ポスターコンテストの表彰

ました。引き続き、目黒会の新体制の話や、ホームカミングデー3年間の比較、目黒会トピックスとして同窓会ラウンジ開設5年の状況や、投稿企画の紹介、支部別投稿状況、ギャラリー写真など、写真や表を交えて分かりやすく説明していただきました。最後に現在募集している同窓会ラウンジ企画の紹介や大学附属図書館利用証発行サービス、結婚式お祝いメッセージサービス、クラス会開催連絡サービスなどの会員サービスの紹介がありました。

次に一つ目の学術講演として電気通信大学i-Powerドエネルギー・システム研究センター教授の曽我部東馬先生から「一光＋一影」を力に変えて…量子コンピューティング技術が切

り拓く未来」と題して講演をいただきました。最初は量子とは何かについての話があり、従来型の量子技術（MRIなど）と次世代型の量子技術（量子暗号、量子通信、量子コンピューティング技術など）について説明がありました。続けて量子技術に関する世界的な動向の話の中で2025年はAIブームにより「量子の冬」が高まることの話がありました。日本における電子コンピューティング技術についてはIsingタイプの量子コンピュータとGateタイプの量子コンピュータの2種類があることの説明がありました。最後に曽我部研究室の代表的な研究活動と業績についての話がありました。

続けて二つ目の学術講演として電気通信大学

学長顧問の梶谷誠先生から「命名とキャッチコピー」によるイメージ戦略／電気通信大学をもっと知ってもらうために」と題して講演をいただきました。電通大をもっと知ってもらうために命名とキャッチコピーによるイメージ戦略の重要性を認識し、広報室を設置して、大学のコミュニケーションマーク制定についての話がありました。また、「電通大通り」、100周年キャンペーン「UECポート」そしてその中の「ドーム絆」、「ドーム友達」、「UECポートロジ」等の命名についての話がありました。特に「電通大通り」については、調布市長とのやり取りなどの裏話についても大変楽しく紹介されました。最後は時間が押して、少々短い講演となってしまったことが残念でした。

●グループ会交流の広場

グループ会交流の広場は12時から新C棟4階403教室で開始され、約70人の卒業生に参加いただきました。前半は昼食をとりながら7つのグループから日頃の活動を紹介いただきました。後半はポスターコンテストを開催し、教室の壁に掲示された24枚のポスターから気に入った作品1点を投票していただき、得票数の多い上位3グループに記念品を贈呈いたしました。ポスターコンテストの結果は次のとおりです。

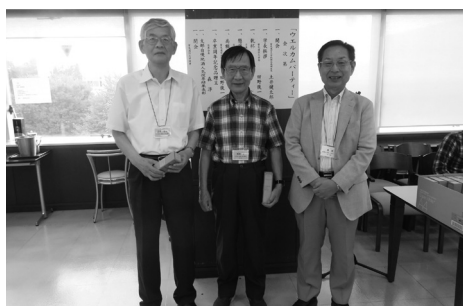
第12回電気通信大学ホームカミングデー



目黒会カフェの会場風景



50周年卒業記念品贈呈



60周年卒業記念品贈呈



第1位 地酒コンテストの会長表彰（首都圏総支部）

- 第1位 UEC WOMAN 女子会
- 第2位 フェリシア会
- 第3位 P50 卒クラス会

●目黒会カフェ

新C棟1階103教室では11時から16時30分までの間、目黒会カフェが開設され、鳥人間サークルの紹介、UEC WOMAN 女子会や通機会の集まりなどで、多くの方に交流の場として活用いただきました。

●ウエルカムパーティー

ウエルカムパーティーは大学会館3階ハルモニアで土井電気通信大学総務企画課室長の司会により16時30分から開始され、97人の参加をいただきました。最初に田野学長から主催者挨拶をいただきました。続けて森会長から乾杯の挨拶をいただきました。しばらく懇談のあと、土井室長から2024年度の高額寄附された方のうち、パーティーにご出席いただいた3人の方のお名前の紹介があり、田野学長から賞状を手渡しました。その後、50周年と60周年の卒業生には森会長から記念品をプレゼントし、森会長を囲んで記念撮影を行いました。お楽しみ企画として10支部からお国自慢の地酒14本を提供い

ただき、「目黒会支部自慢地酒コンテスト」を行いました。地酒人気投票の結果、1位から3位までの表彰を行い、会場は大いに盛り上がりました。

- 第1位 イットキー（首都圏総支部）
- 第2位 夜明け前（長野支部）
- 第3位 吟風（ぎんぷう）50（北海道支部）
白老（はくろう）（東海支部）

最後は大家電気通信大学理事から閉会の挨拶をいただき、盛況のうちに終了することができました。

支部総会報告

北海道支部

日時／2025年9月27日（土）

場所／総会…ホテル札幌カーテンパレスおよびオンライン
イベント…総会前に北海道庁赤れんが庁舎見学会およびオンライン

参加人数／会場13名（支部会員）＋オンライン1名（道外支部会員）

今年はこの夏に大規模改修工事を終えた北海道庁旧本庁舎「赤れんが庁舎」の見学会を企画しました。道民でも子供のころに見学して以来という方が多く、ボランティアガイドの説明を受け、改めて北海道開拓の歴史を学びました。

総会は議事、来賓挨拶と続き、田野学長から大学教育の改革への取り組みや課題、森会長からは目黒会の歴史について講演いただきました。懇親会では今回初参加の方もおられたことから、参加者全員の自己紹介および近況報告をいただき、美味しい料理と共に沢山の笑顔と声があふれました。

東北総支部

日時／2025年6月21日（土）

場所／秋田県立大学（ハイブリッド開催）

参加人数／20名（会場18名＋オンライン2名）

総会では前年度の活動および会計報告、今年度の活動計画、役員体制の報告、審議、決議が行われました。来賓として大学から田野学長、目黒会

から中村副会長のご講演をいただきました。次に秋田県立大学 山口高康教授（2001年電通大学院修了）から「社会を効率良く駆動させるサイバーフィジカルシステムを 秋田から世界へ」と題した特別講演をいただきました。その後参加者全員で秋田県立大学の見学を行いました。

総会終了後、温泉施設ぼろっくに移動し、懇親会を実施。温泉を堪能しつつ、田野学長、中村副会長、他支部参加者を交えて和やかに歓談、親睦を深めました。翌日道の駅ねむの丘での鳥海山展望、白瀬南極探検隊記念館の見学を行いました。

首都圏総支部

日時／2025年9月13日（土）14：30～19：00

場所／総会…UECアラリアンスセンター100周年記念ホールおよびオンライン

懇親会…大学会館3階「ハルモニ」（着席式）

参加人数／41名（現地32名、オンライン9名、うち総支部会員33名）

山崎成副総支部長が全体を進行し、総会は14：30から議長／竹田智彦総支部長、書記／宮澤信一郎副総支部長、宮保憲治幹事にて、前年度の報告、今年度の活動計画・予算、役員体制が審議・承認されました。田野俊一学長、森淳目黒会長のご来賓挨拶、出席者紹介、記念撮影を経て、15：40から国立天文台教授アルマプロジェクト長／井口聖氏より『宇宙と生命の起源…その最前線そして今後の展望』と題し、アルマ望遠鏡、ジェイムズ・ウェッブ宇宙望遠鏡による宇宙と生命の起源の探究成果についてご講演をいただきました。懇親会は17：10からご来賓紹介、三木哲也目黒会監事の乾杯ご発声により開宴となり、森会長からの助成金贈呈、和

やかな懇談を経て盛会のうちに19：00お開きとなりました。

長野支部

日時／2025年7月5日（土）

場所／上田市内上小漁協会議室・東急REIホテル

参加人数／25名

議事では2024年度活動・会計報告と2025年度の活動計画・支部役員人事が承認されました。来賓として大学から田野学長、目黒会古川副会長が出席され講演が行われました。その後、宮保憲治様（東京電機大学名誉教授）による「5G／6G時代に向けた情報通信技術の最前線」のテーマにて特別講演が行われました。

懇親会では他支部からの参加者を含む来賓の皆様からの挨拶後、会食を楽しみました。参加者の皆様には近況報告をしていただき、大いに盛り上がりました。

開催前には希望者のみですが、千曲川の川魚料理会食（於…つけば漁小屋）を楽しみました。

関西総支部

日時／2025年6月7日（土）

場所／大阪市内貸会場（ハイブリッド開催）

参加人数／25名（会場20名＋オンライン5名）

当日は来賓挨拶（電気通信大学 村松理事、目黒会 森会長）、総会（各種報告、特別講演、懇親会の順に行われました。

特別講演では「電気通信大学の知名度向上のための広報戦略について」をテーマに電気通信大学副学長 坂本真樹教授にご講演いただきました。「とにかく電通大を有名にしたい」とい



北海道支部



東北総支部



首都圏総支部



長野支部



関西総支部



中国地方支部



四国支部

中国地方支部

日時／2025年6月28日(土)

場所／広島駅近くの貸会議室およびオンライン

参加人数／14名(会場13名+オンライン1名)

会場とオンラインの併用で開催し、総会では前年度活動&会計報告、今年度の活動計画&予

う熱い思いを込めた広報戦略、具体的には交通広告(調布駅副駅名標、車内広告、ラッピングバスなど)、キャッチフレーズ、コミュニケーションマークやキャラクター活用例など多岐にわたる取り組みを紹介いただきました。電通大卒業生として大学の知名度向上は感心が高く参加者から多数の質問・意見が寄せられ大変好評でした。

総会終了後、会場参加者は席を変え懇親会を開催。村松理事、森会長を囲んで和やかに歓談・親睦を深めることができました。

来年もより参加しやすい支部総会を目指していきます。会場参加が難しい場合はオンライン参加をお待ちしております。

四国支部

日時／2025年9月6日(土)

場所／愛媛県新居浜市

参加人数／18名

日本三大銅山の一つ、別子銅山の跡地にある観光施設で支部総会を開催しました。総会では、

算、役員体制について審議、承認されました。ご来賓として大学から大家理事、目黒会から高橋副会長の講演をいただきました。また支部から「自宅の防犯システムの構築について」のテーマで講演を行いました。続いて目黒会からの助成金の贈呈、記念撮影の後、場所を移して懇親会を行いました。懇親会では岡山と広島の方の交流会もあり、参加された方のお酒や料理を楽しみました。本支部は中国5県の会員の方で構成されています。活動計画に挙げた5県の会員同士が交流できる機会を作る取り組みを進めて参りますので、よろしく願います。

活動報告や新役員の選出などが行われ、来賓の村松理事、中村副会長からご挨拶をいただきました。その後は懇親会で賑やかに懇親を深め、締めくくりには、ガイド付きで観光坑道を見学しました。

愛媛県東予地区には、思いのほか多くの同窓生が在住していることがわかり、地元にお住まいの方々にもご出席いただきました。

翌日には「東洋のマチュピチュ」として知られる別子銅山東平エリアを訪れました。なんと、そこで幼少期を過ごされた同窓生がガイドを務めてくださり、実際にその地で生活された方からのお話を聞くことができました。当時の生活の様子が鮮やかに蘇るような、大変貴重な体験となりました。

Unique &
Exciting

研究編

庄野 逸

大学院情報理工学研究科 情報学専攻

情報理工学域 I 類（情報系）教授

脳・医工学研究センター／人工知能先端研究センター

<https://sites.google.com/view/shounolab/>

庄野逸研究室

匠の眼を機械に ——画像×AIで社会の安心をつくる

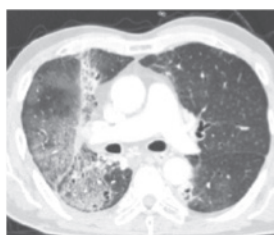
庄野研究室がめざすのは、「人が見てわかる」を誰もが使える道具に翻訳することです。熟練者が一瞬で見抜く「微妙な違い」は、分野外の人間には判別しにくいものですが、これらの違いは、医療・ものづくり・社会インフラの現場で意思決定を左右します。このような違いは人間が感じる、質感のむらや粒のそり方、にじみの広がりにも現れます。我々は、脳の視覚に学んできた発想と深層学習を組み合わせ、画像の模様（テクスチャ）に宿る手がかりを抽出し、根拠を伴う判断へと橋渡しします。ここで、重要なのは完全な機械で人を置き換えることなく、感覚を拡張し画像特性を浮かび上げさせることにあります。人の経験を広げ、継承し、再現するAIが研究の核です。現場で使われる技術とは、精度と同じだけ「納得感」が重要だと考えています。だからこそ、結果だけでなく「なぜそう言えるのか」を示す仕組みづくりがこだわります。

我々の研究室では、対象を画像に限定しているわけではありませんが、医療や材料といった分野の多くはその測定結果を画像化（可視化）することで、対象の理解を促進します。画像は点の集合ではなく、秩序と乱れの地図です。時間と空間における、周波数の偏り、スケールごとの粗密、局所相関やエッジのつながり方は、対象の「現在の状態とこれまでの履歴」を語ります。私たちはこの「模様の言語」を、

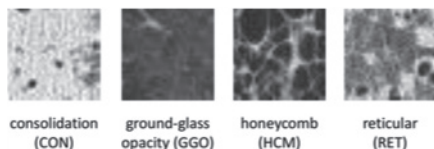
- ・ 物理・統計（フリーエ解析やマルチスケール解析、相関・分布指標）、
- ・ 学習の表現（深層特徴、弱教師・領域適応・データ拡張）、
- ・ 説明の可視化（どの領域・質感が効いたかを図示）

の三つを用いて往復しながら解説します。ブラックボックスに結果を委ねず、特定の模様が判断にどう影響したかを同時に提示する姿勢が、応用横断の強みを生みます。粗い見立てから細部の確証へ段階的に積み上げる「視覚の作法」を、数理とプログラムに置き換える—これが我々のとっているアプローチです。

我々の研究室の応用分野の一つは医用画像の診断支援です。医用画像は診断の起点であり、同時に不確かさの源でもあります。我々のアプローチは、AIの出力を説明可能な指標で補強することにあります。図1はCOVID-19などの症状として現れるびまん性肺疾患画像のX線CT画像です。このような人体内部の画像は、体内を透過してくるX線を用いて体の断面情報を可視化しており、空気のような軽い成分は黒く、組織は白っぽくなる傾向にあります。肺の大部分は空気なので黒っぽくなるはずですが、右肺（上図中の左側の領域）は、白っぽくなっており機能していないことが示唆されます。この白っぽい領域が、びまん性肺疾患と呼ばれる疾病であり、びまん性肺疾患領域の典型例を拡大

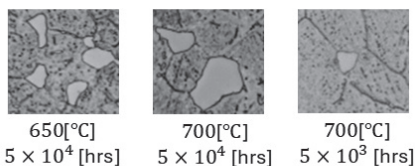
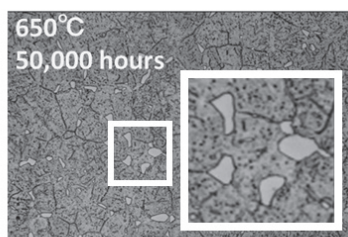


X線CT画像による断層画像



(a) びまん性肺疾患症例

図1



(b) クリープ破断試験顕微鏡画像

図2

図(一辺は1・6 cm)として示したものが左図になります。診断医はこれらの疾病領域ができるだけ小さいうちに発見することを求められます。画像情報から診断を実際の境界の粗さ、内部の輝度ゆらぎ、構造の連続性など、医師の所見と響き合う特徴量を併記し、「この部分は周囲よりテクスチャが乱れ、既往所見と一致するため注意領域と判断」と根拠を言葉にして返す。一致しない場合は不一致の理由(撮像条件、アーチファクト、学習分布の偏りなど)を可視化し、議論の出発点を整えます。AIに「答えを言わせるのではなく、医師とAIが同じ根拠を共有して合意するための補助線を引く」それが私たちの設計思想です。結果の数字だけでなく、

く、判断に効いた模様を示すことで、臨床導入の心理的ハードルを下げます。我々の、もう一つの応用分野として材料計測の画像があげられます。金属やセラミックスの表面には、加工や熱履歴の「足跡」が模様として刻まれます。図2は、金属材料を特定温度下で曝したとき形成される析出物の顕微鏡画像で、白枠内にはその構造を拡大表示しています。析出物は、温度・時間・加えられた応力に応じてサイズが変化するため(下図参照)、発電所などで使われる金属配管の劣化を診断する手がかりとして用いられます。析出物のサイズや配列の整い具合、微小欠陥の分布―これらを統計と学習で定量化し、曝露温度・時間の推定や外

れ値検知を行うことで、品質と安全の判断を支援し、匠の勘どころを再現可能な手順へ翻訳し、技能の継承にもつなげます。たとえば「析出物の輪郭の形状」と「析出物の大きさ」の組み合わせが温度履歴の指標になりうる、といった「現場レベルで語られる特性」を、可視化とともに提示することができるようになります。撮像条件の揺らぎに頑健な前処理と特徴設計、そして、「似ているが違う」を見分ける学習器を組み合わせることで、現場が意思決定に使える解析結果を提供できるようになります。単なるヒートマップではなく、「なぜその区別が必要か」といった特徴による理由付けが、検出↓理由↓優先度といった診断手順を理解できる形で一貫させ、さらに、誤検出の典型パターンや撮影時の注意点も併記し、現場側の運用知を蓄積していくことで「匠の眼」は鍛えられていきます。

誰がいつ実行しても同じ結果に至るよう再現性、観測時に考慮すべき、光量・距離・角度・ノイズに対する堅牢性、判断の拠りどころを可視化+指標+言語で提供する説明可能性、これらの実現によって、研究は「論文のため」ではなく現場で役に立つ知へと磨かれます。我々は、画像に潜む小さな手がかりを拾い上げ、人の経験を広げ、継承し、再現する技術へと磨き上げ続けます。匠の眼を機械に、人の経験とAIが、ともに社会の安心をつくると我々は考えています。

Unique &
Exciting

研究編

村上 靖宜

大学院情報理工学研究科 情報・ネットワーク工学専攻
情報理工学域Ⅱ類（融合系）助教<https://sites.google.com/view/murakamilab/>

村上靖宜研究室

アンテナ・電波伝搬と メタマテリアルの研究

研究室の概要

村上研究室は2021年10月に発足して、今までに卒業生が3名、現在は学部4年生が2名、研修生が1名在籍しています。（2025年10月1日時点）まだ小規模な研究室ではありますが、現在の生活のライフラインの1つとなった無線通信に関する研究をしています。

本研究室では、無線通信の中で特にアンテナ・電波伝搬および電波の特性を制御できるメタマテリアル技術を中心に幅広く研究をしています。2020年からサービスが開始された第5世代移動通信システム（5G）や次世代6Gの無線通信では、高い周波数が利用されます。それに伴い、電波の伝搬損失や遮蔽物による影響が大きくなるため、効率的なアンテナ設計や新たな伝搬環境の制御技術が重要となります。これらの課題に対して、シミュレーション解析から試作・実験まで一貫した研究を行い、次世代の無線通信インフラを支える基盤技術の創出を目指しています。また、産学連携や研究機関との共同研究にも積極的に取り組み、実用化を見据えた成果の発信に努めています。

最新のトピックス

高い周波数が利用される第5世代移動通信（5G）や次世代6Gの無線通信では、電波の伝搬損失や遮蔽物による影響が大きくなるため、電波が届かない領域（不感エリア）が生じる問

題があります（図1）。この問題に対して、メタマテリアルのもつ電波制御機能を応用することで、反射・透過・回折特性を自在に操作し、電波の到達範囲を拡張する研究が盛んに行われています。メタマテリアルとは、自然界には存在しない電磁気的特性を人工的に実現することを目的とした構造体であり、波長より十分小さい導体や誘電体の単位構造を周期的に配置し、その集合体として新たな電磁応答を示すように設計されます。この設計手法により、従来の自然材料では実現困難であった負の屈折率や特殊な透過・反射制御、電波吸収などの機能が可能になります。

特に近年注目を集めているReconfigurable Intelligent Surface (RIS) は、壁面や建物表面に設置することで、電波環境そのものを動的に最適化できる点が特徴です。RISでは、各ユニットセルの位相や反射特性をリアルタイムに制御することができ、電波のビームステアリングや拡散、干渉低減などを柔軟に実現します。

最新の研究紹介

不感地帯改善が可能なメタマテリアルのひとつとして、当研究室では「メタマテリアル電波散乱シート」の開発に取り組んでいます。メタマテリアル電波散乱シートは、従来のメタマテリアル反射板や「Reconfigurable Intelligent Surface」(RIS)とは異なり、複数の方向か

ら入射する電波を広角に散乱する特性を持っています。そのため、通信対象の移動に合わせた電波伝搬の再構成を行う必要がなく、設置位置の微調整なしでさまざまな伝搬環境に対応できます。また、軽量かつ薄型で電源を必要としないため、壁紙のように貼り付けて使用することができ、単純な平面構造であるため製造コストが低く、大面積に展開することも容易です。

メタマテリアル電波散乱シートは、薄い両面導体基板の片面に、反射位相が0度となるメタマテリアル面と180度となる金属面を組み合わせた平面パターンを形成して構成されています(図2)。この設計により、入射した電波は広角に散乱され、特定方向への集中が抑えられるため、不感地帯や死角となる領域への電波到達性が向上します。本研究室では、このメタマテリアル電波散乱シートの設計・試作・評価を通じて、次世代無線通信における高周波帯の有効活用と、安定した通信環境の実現を目指しています。

最後に

村上研究室では、メタマテリアルやアンテナの基礎設計から試作・実験までを一貫して行うことで、無線通信環境の高度化に向けた新しいソリューションの創出を目指しています。今後は、メタマテリアル電波散乱シートの機能拡張として、周波数選択性や動的制御を付加する研

究や、複数シートの組み合わせによる大規模環境下での電波制御効果の検証も進める予定です。また、アンテナやメタマテリアルを活用した屋内外の通信品質向上や、省エネルギー通信システムの構築、統合センシング通信(ISSAC)への応用といった実践的課題にも取り組む方針です。こうした研究活動を通じて、次世代無線通信技術の発展に寄与するとともに、学生が最先端技術に触れながら実践的な研究力を養う場としても機能することを目指しています。

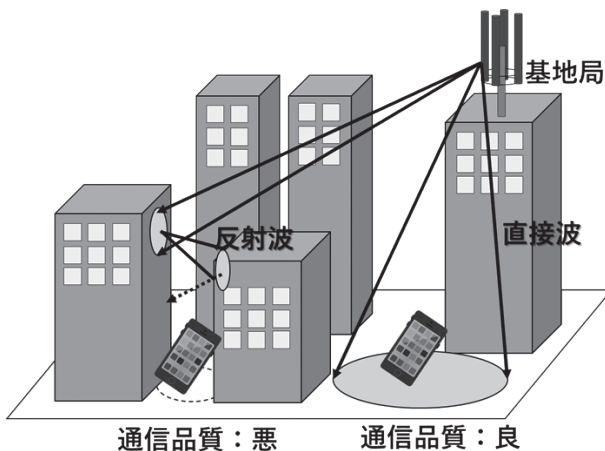


図1 不感エリアの問題

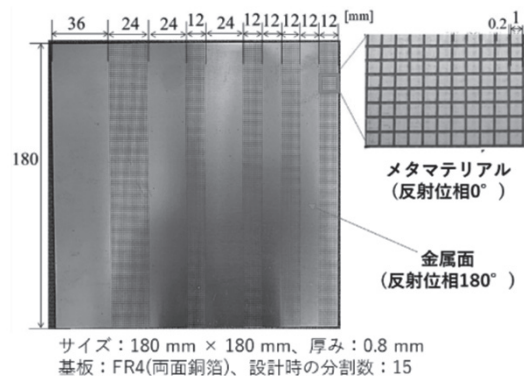
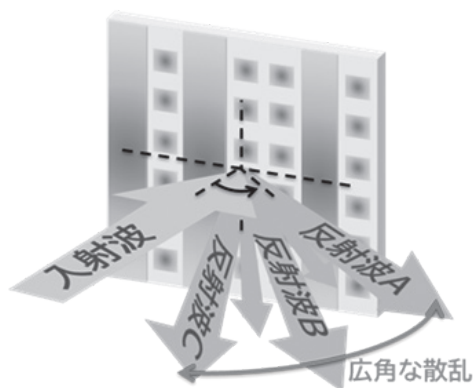


図2 メタマテリアル電波散乱シート

Unique &
Exciting

研究編

遠藤 晋平

大学院情報理工学研究科 基盤理工学専攻
情報理工学域Ⅲ類(理工系) 准教授
<http://www.qfibt.lab.uec.ac.jp/>



遠藤晋平研究室

量子の世界を数式やシミュレーションで解明する

研究室的概要

遠藤研究室では量子物理の理論研究を行っています。原子や電子、さらに小さい原子核やクォークなど、ミクロな世界を記述する物理法則が「量子力学」です。遠藤研究室では特に、2粒子、3粒子、4粒子などの少数個のミクロな粒子が相互作用して相関すること、どんな面白い量子状態が発現するか？また、粒子を増やしていった際にどんな量子多体現象が現れるか？という問いに挑んでいます。研究方法としては、複素関数や特殊関数などの数学を用いた手計算や、コンピュータを用いた数値計算(大きな行列の固有値計算)を駆使します。ニュートン力学と異なり、量子力学の基礎方程式は、粒子数が増えると指数的に解くのが困難になる(行列サイズが大きくなる)、という特性があります。そのため発見から100年経過した現在でもなお、「量子力学で何が起きるか？」は最先端の研究課題であり続けています。この問いに答えることは、固体や半導体中の電子の動きを知り、量子化学反応を理解することに直結し、デバイス・材料開発、新たな創薬反応の発見、量子コンピュータ・量子シミュレータ開発などの応用科学にも貢献する、という意義をもっています。

研究室所属の学生

2023年10月に着任してきた新しい研究室です。卒研究生3名(2期生)、M1 4名(1期生)の電通大生に加え、私が前職の東北大助

教時代に指導していた学生(現D2)を指導委託で継続指導しています。さらに、2025年4月からは山鹿助教が加わり、現在は計10名のメンバーで東6号館5階で活動しています。これまで東北大や電通大で指導した学生は、全員第一・第二志望の企業などに就職や内定を得ています。これは、理論物理の研究が、自分で上手く時間を管理すれば、就活と研究を両立しやすいという特長が表れていると感じています。研究室に特にコアタイムなどは無く、計4時間/週程度の進捗報告・輪講・論文紹介などの時間以外は、研究室に来る時間も自由で、好きなように各自の勉強・研究を進めるスタイルで行っています。幸い学生は皆、量子物理をより深く学び、研究を行うことにとても意欲的で真摯に取り組んでくれており、このようになかなか自由な環境でも、高い学習や研究の質を維持することができています。

理論物理系の学生の進路は、研究者の他、金融・保険業界、コンサルティング、IT・Web・通信・インフラ関係、メーカー、公務員、など本当に多彩です。今所属の学生らも、自らの適正、何をやりたいか、何が幸せか、どう生きたいか、を考えて、各々の進路を決断し、その道にきつと邁進してくれるだろうと信じています。

理論物理学者の日常

「理論物理の人って普段何をやるの？」と思う人も多いかもしれません。本や論文を読んだ

研究分野・研究テーマ

「量子少数多体問題」という研究に取り組ん

り、他の人とホワイトボードを用いて議論することで、研究のアイデアがでてきたりします。それを基に、ちよつと雑な近似をした手計算や単純化したモデルで数値計算をしてみます。すると、少し面白い結果が出たりするので、もう少し真剣に、よりrigorous（だけど大変）な手計算や数値計算に挑みます。その結果をちゃんとまとめて論文を出す。という感じなので、「本・ホワイトボード・PC・紙とペンが友達」という日常です。

論文の著者数も1〜3人が普通。著者が4人以上の理論物理の論文は「多い！」と感じます。そのため各自が高い志と強い情熱で学問や研究に取り組むことがとても大事です。もちろん人間なので調子が悪い時期もあります（私もあります）。が、そんな時、他の共同研究者が研究を進めておいてくれる、なんてことはありません。自分の心と体のコンディション管理が非常に大事です。

紙とペンとPCがあれば研究ができるので、いつでもどこでも研究ができ、平日・休日の境があまり無いです。私は子供を公園に遊びに連れて行って見守っている際に、頭の中で解析計算したりコードを考えたりすると研究が捗ります。飛行機の長時間フライト中は、煩わしいメールが一切来ないので、計算や研究が一番捗る、という人もいます。

量子力学の基礎方程式（シュレディンガー方程式）

$$i\hbar \frac{\partial}{\partial t} \Psi(\mathbf{r}_1, \dots, \mathbf{r}_N) = \left[\sum_{i=1}^N -\frac{\hbar^2 \nabla_i^2}{2m_i} + \sum_{i < j} U(\mathbf{r}_{ij}) \right] \Psi(\mathbf{r}_1, \dots, \mathbf{r}_N)$$

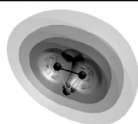
解析計算

- ・厳密解を見つける
- ・摂動計算

数値シミュレーション

- ・線形行列方程式の対角化
- ・微分方程式の数値解

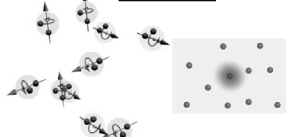
冷却原子・分子



原子核



多体問題



でいます。これは2粒子や3粒子など少数粒子のシュレディンガー方程式を解き、原子たちが束縛して分子を形成する現象や、陽子・中性子が集まって原子核が形成される現象を理解しよう、という学問分野です。中でも特に興味を持つているのは、非常にゆる〜く弱束縛した、「つかず離れず」な分子や原子核現象です。面白いことに、このような弱束縛した量子系では、あらゆる系で全く同じ挙動をするという「ユニバーサリティ（普遍性）」が成立します。「つか

ず離れず」の分子の性質をちゃんと理解できれば、原子核も、クォークも、固体中の電子も、全部わかってしまう！というわけです。ナノケルビンという極低温まで冷やされた原子気体で、そのような「つかず離れず」の分子状態が観測されています。それらの実験に対応した量子少数系の理論研究をすることで、原子分子のみならず、自然界のあらゆる量子系の挙動を全て一挙に理解したい、という野心で研究に取り組んでいます。このように、冷却した原子を用いて他の物理系を理解しようという試みを「量子シミュレーション」と言います。冷却原子型量子シミュレータ開発に理論面から貢献する、これが遠藤研究室のミッションです。

最近の研究と今後の展望

エフィモフ状態という「つかず離れず」の量子3体現象について盛んに研究しており、エフィモフ状態の研究については世界でトップを走っていると自負しています。また、ポラロン現象などの多粒子系の研究にも、量子2体、3体問題の知見を活かす視点で取り組んでいます。さらに、新たに助教として着任された山鹿助教の専門である非平衡量子ダイナミクスの研究とも相まって、少数系から多体系まで、そして平衡系から非平衡系まで、幅広い量子現象の基礎学理を探究する「量子少数多体理論物理研究室」として、「量子物理をより深く理解し、究めたい」という同じ志を持つ学生たちと共に取り組んでいきたいと思っています。

Unique &
Exciting

キャリア編

渡辺 修司

1993年電子情報学科入学
立命館大学映像学部教授、
立命館大学ゲーム研究センター長

たかがゲーム、されどゲーム

私は2025年9月末現在、立命館大学ゲーム研究センターのセンター長をしております。同センターは国内で唯一大学内に設置されたゲーム研究組織です。ゲームの研究!?と驚かれる方もおられるかもしれませんが、しかし、2019年に京都でゲームの国際学会を主催したときには、世界から延べ700人の研究者が来訪しています。ゲームにおいては、日本は国際的に注目される研究対象であります。

また、私が最初にゲーム産業に従事したのは、電気通信大学電子情報学部同学科を1997年に卒業後、株式会社スクウェアにゲームプランナーとして入社したところからはじまります。親戚からは、ゲーム業界に就業することを、「ピコピコに入るの」と言われたのを憶えています。「ピコピコ」とは、80年代に一斉を風靡したファミコンの矩形波が出す音を模した俗称であり、当時ゲーム産業というものが、世代間で隔絶されており、まだまだ小さい産業であることも推測できるかと思います。

比較の意味で、2025年現在のゲーム産業界隈を数字で眺めると、国内のゲーム関連就業者は20万人以上（CESA, 2025）、ゲームの世界市場の規模は現在では31兆円規模（ファミ通白書, 2025）、これは映画を数倍凌駕する規模となっています。また、小中高生を対象とした人気職業TOP10（第一生命, 2025）に「ゲームクリエイター」は数年間入り続けております。

日本では「ゲーム」と呼称するコンピュータ

を用いた遊戯は、海外では「Digital Game」と呼ばれています。また、「Game」という単語の起源を考えると、「ga」は古代ゲルマン祖語でいう、「一緒に」、「man-」が「人間」を表しており、「人々が集う」という意味となっています。この「Game」の語源に倣い、私自身の大学入学前からその後まで、どのように人々と集ってきたのか、その空間と人々を思い起こしてみたいと思います。

私が「Digital Game」（以下、ゲーム）に出会ったのは小学生の低学年のころでした。ボーリング場や駄菓子屋に設置された『スペースインベーダー』（TAITO, 1978）などのアーケードゲームが最初の体験だったと思います。その後、父が関数電卓やPCを購入していたこともあり、小学2年生のころには自分でゲーム制作を行っていました。ただ同時期に『ファミリコンコンピュータ』（任天堂, 1983）が発売され、ファミコンのある友達の家によくみんなで集まってゲームをして遊んでいました。私の住む地域は貧しい地域だったためか、共働き世帯が多く、結果的に、放課後は子供だけの楽園でした。日が暮れるまで、野山で走り回ると共に、ファミコンをして過ごしていました。

こうした田舎での生活を高校まで過ごした後、大学時代は工学を志し、都心である調布で過ごすことになりました。電気通信大学に入学後は授業やゼミ、アルバイトで忙しかったのですが、「人々が集う」という観点では「五思寮」は重要な場所でした。私自身家庭の経済困窮という



事情もあり、4年間入寮を許されました。おかげで無事に大学生活をおくることができており感謝しています。一方で当時の生活を思い返すと、どの部屋にいても初代PlayStation（SCE、1994）やスーパーファミコン（任天堂、1990）などのゲーム機があり、寮生のみならず、友人の多くが授業の合間や、深夜に部屋に集まりゲームをしていたのを今でも思い出します。こんな大学生活だったこともあり、ゲーム業界を目指すのも自然だったかもしれません。右も左も分からないまま、子供時代の野山の経験などをゲームの企画書にして送付したところ、運良く株式会社スクウェア（現スクウェア・エニックス）の目に留まり就業することになりました。

少しだけゲーム業界のプランナーに興味がある後輩にアドバイスするとしたら、ゲームからゲームを作るような、縮小再生産するのではなく、自分自身が感じた現実世界で感動した事象の「難易度」を分析してデジタルゲーム化してみてほしいと思います。ゲームにおいても観察と抽象化は重要であります。私の場合は、それが幼少期の野山であり、都心では体験できない鬱憤をデジタル化したものだったのだと思います。

さて、会社に就業後、配属された最初のプロジェクトは、『Final Fantasy III International』（1997）でした。社内だけでもプロジェクトは100人。1フロア全員が1つのゲームを作るために集っており、当時では類を見ない規

模のゲーム開発現場でした。比較的自由な会社であり、その後、独自企画のディレクターを任せられ、開発メンバーと共に株式会社タイトーに移籍して作ったのが『ガラクタ名作劇場ラクガキ王国』（TAITO、2002）です。

本作では幼少時代から何度も映画を視聴していたスタジオジブリの方々と知り合い、一緒に作品制作をする機会にも恵まれました。当時ジブリの第4スタジオは一軒家で、『となりのトトロ』の作画監督の佐藤好春氏等と共に、ゲームのエンディングアニメも作っていただきました。本当に絵を描くのが好きな人たちが集まる空間は、私自身も小学生時代に戻ったかのような感覚であり、スクウェアでの大規模開発とは異なる貴重な経験でした。本作は文化庁メディア芸術祭での審査員賞を受けるなど私の代表作ともなりました。

その後、2007年より実務家教員という形で、立命館大学映像学部にて「ゲーム制作を教える先生」となりました。この時期、大学でのゲーム教育とは形もなく、同僚たちと共にゼロからゲーム制作教育を立ち上げていくことになります。私と同じく実務家教員として学部におられたのはファミリールコンピュータの産みの親である上村雅之先生でした。その後上村先生は、ゲーム研究センターの初代センター長となり、2021年に逝去されるまで、後進の育成に尽力されておられました。私自身も、先生の最も近くでご指導をいただいた一人です。

現在の私は、「ゲームとは何か?」といった

疑問を追求する同僚研究者たち、また、「ゲームを作ること」に没頭する多くの学生に囲まれ、ゲーム自体が「人々が集う」重力源となり、私自身も、その中の一人のメンバーとなっています。

おそらく、他の多くの学問・研究領域からすると、ゲーム研究・教育とは萌芽的な状況であるのは間違いありません。一方で現代において、人々の多くを魅了するまでに成長したデジタルゲームという遊びを研究することは、本来的に「人間研究」であり、これを追求することは、AI時代においても、自分だけの探求行為である「遊び研究」として意味を成すと感じています。



2017年スロバキアの招聘講演前の上村先生と著者（写真右）

Unique &
Exciting

キャリア編

古林 利明

1978年電子工学科入学
株式会社ガクファーム代表取締役
ガクファーム&ワイナリー
<https://gakufarm.jp>

この土地らしい
ワインを造りたい

ワイン造りと電通大

私は現在、生まれ故郷の信州松本で小さなガレージワイナリーを営んでいます。約1ヘクタールのぶどう畑で12種類のぶどうを栽培し、年間約5000本のワインを生産しています。電通大からワイン造りへのキャリアは唐突に思われるかもしれませんが、ぶどう栽培やワイン醸造は「探究」の対象であり、それは電通大の学生時代に得て大切にして来たものです。

学生から社会へ

学生時代は決して勤勉な学生ではありませんでした。モダンジャズ研究会に所属しバンドを組んでジャズにうつつを抜かしていました。電子物理研究室に居場所を得てから恩師の角田稔先生（後の学長で結婚式では仲人を務めていただきました）や仲間から探究心の大切さを学びました。量子力学に興味があり卒論のテーマは電磁誘導炉の磁性体に関するものでした。

卒業後は富士電機株式会社に就職し、半導体の海外事業に関わる道を選びました。海外出張も多く仕事は刺激的で面白かったのですが、大企業の中で窮屈さのようなものを感じ、30代半ばで翻訳者として独立しました。

翻訳の仕事

翻訳は緻密な職人的な仕事です。原文の内容を過不足なく丁寧に他言語に置き換えて表現しなければなりません。そのためにはまず原文を正確に理解することが必要です。主に特許文書の翻訳を手がけていましたが、特許の技術は狭く深く、まったく新しい概念のものもあり、案



ワインとの出会い

件に向かうたびにその分野の専門書を何冊も読む毎日でした。今はインターネットで瞬時に何でも調べられますが、専門書と辞書だけが頼りで仕事場は書籍で埋まっていました。しかし、そのような未知の分野を読み解いてゆく作業は、新しい世界を旅するようでスリリングでした。また自分ひとりで完結する仕事は手応えを感じられ自分の性に合っていたようです。

翻訳の仕事は順調で依頼も多く、子どもが小学校に上がるタイミングで生まれ故郷の信州松本にUターンしました。松本は山々に囲まれ自



然も豊かで、自分で仕事を調整して好きなときに山に登ったり家族で旅行したりできる暮らしには満足していましたが、50代半ばになって、言語を置き換えるだけの翻訳の仕事に物足りなさを感じるようになりました。元々工作や手を使うことが好きで、もっとクリエイティブな仕事をしたと思うようになったのです。高齢化した親の農地をどうするかという問題も始まっていました。ちょうどそんな頃、ワイン醸造地である隣の塩尻市でワイン醸造家を養成する「塩尻ワイン大学」が開講され、面白そうという軽い気持ちで応募し4年間学ぶことになりました。それまでワインに特別強い興味があつたわけではなかったのですが、その分野の第一線の講師陣による栽培学、醸造学、テイスティング、ブランディングなどの充実したカリキュラムは、それまで関わってきた工学とは全く異なる分野でとても刺激的で、ワインの世界の奥深さに一気に引き込まれました。ワインは飲食や観光とも関わりが深く、その未知の領域に踏み込めることも魅力でした。

入学翌年には畑に150本のメルロのぶどう苗を植えました。それまで農業経験がほとんどなかったので試行錯誤しながら畑を少しずつ広げ、現在は約2000本のぶどうを栽培しています。

ワインを造るということ

ワイン造りは自然との対話です。冬の間眠っていたぶどうの樹は、北アルプスの雪解けとともに目覚めて枝をぐんぐん伸ばし、葉を繁らせます。それから秋の収穫まで、夏は日の出と共に

に畑に出てぶどうを病害虫の脅威から守るさまざまな作業を行います。ワインの美味しさはぶどうの品質で決まるからです。収穫のタイミン

グは、ワイナリーの分析室でぶどうの糖度やpH、酸度などを測定し、最終的にはぶどうの粒を噛んで熟度を確認して見極めます。収穫したぶどうを破碎してタンクに入れると、酵母や乳酸菌など数十種類の微生物が活動を始めます。ワインになる発酵過程で様々な要素が複雑に絡まり合い、イメージするワインにするには醸造の深い知識と経験が必要になります。微生物たちの働きを見守り、適切に手助けすることが醸造家の役割です。

ワインには「テロワール」という言葉があります。その土地の気候、土壌、地形、風土、さらに造り手の哲学を含む概念です。ワイン造りを始めてから、テロワールを知るためにフランスやイタリアのワイン産地を何度か訪ねました。ブルゴーニュやトスカナでは、その気候や土壌だけでなく、人々の歴史や文化もワインの一部になっていることを実感しました。

私が信州松本でワイン造りをする意味は、この土地のテロワール、すなわち「この土地らしさ」を探究し、それを一本のワインに込めて表現することです。小さなワイナリーですが、世界の人を感動させるワインを造ることを目標にしています。

ワイン造りを始めて12年目。ここ数年はテレビ番組や雑誌でも取り上げられ、昨年は日本ワインコンクールで賞を頂くことができました。名だたるホテルやレストランで使って頂けることも増え、歩んできた道のりに手応えを感じて

います。

人生は旅のようなもの

ワイン造りは電通大の学びとはまったく異なるようにも見えますが、その根底には「探求」というテーマがあります。新しい世界に踏み出し、学びを重ねることは、まるで旅をするようなものです。その旅の途中で得た経験や出会いが、自分を成長させ、人生を豊かにしてくれるのだと思います。

後輩の皆さんもどうか自分の素直な興味や関心に向き合い、その歩みを楽しんでください。きっとその先に自分らしい景色が見えてくるはずですよ。



スマートテクノロジーフォーラム(STF) 2025

AIが変える社会

～挑むべき課題と描く未来～

2025年9月26日（金）14:00～17:50

電気通信大学創立80周年記念会館と
オンラインによるハイブリッド開催

学術講演委員会委員長

上田敏樹

スマートテクノロジーフォーラム（STF）2025は、「AIが変える社会 ～挑むべき課題と描く未来～」をテーマに、東京科学大学特任教授 市川類氏、日本アニメフィルム文化連盟事務局長 福宮あやの氏、東京学芸大学教授 森本康彦氏、電気通信大学教授 伊藤毅志氏の4名の講演者を迎え、対面とオンラインによるハイブリッド方式により開催しました。創立80周年記念会館講演会場では約40名、オンラインでは約60名の合計約100名の同窓生、更に広く企業や一般の方々にもご聴講いただき、目黒会による社会貢献の役割を果たせたことに感謝申し上げます。

講演は、STF会長三木哲也電気通信大学名誉教授からのご挨拶（上田代読）の後、市川氏から「世界と日本のAI規制・ガバナンス政策を巡る最近の動向」のタイトルで、AI規制・ガバナンス政策は、技術革新と社会的リスクへの対応が求められる中、各国で多様なアプローチが進んでいること。生成AI登場後、規制強化へと動いた世界は、2025年に入り、技術・産業構造の変化や競争力確保の必要性から、米国を中心にイノベ

ション推進へと政策を転換している中で、技術面で遅れている日本は中立的役割を果たすことが重要であることについて解説されました。

2番目の講演では、福宮氏から「Animate-Generate」著作権の現在地」のタイトルで、アニメ制作現場ではAI生成技術の導入が進む一方、著作権の帰属やクリエイターの権利保護が大きな課題となっていること。現行法ではAI生成物の扱いが曖昧であり、制作工程や外注クリエイターへの報酬、利益配分の問題も浮上しており、今後は業界全体でのルール整備や社会的合意形成が不可欠であり、AI時代の新たな著作権の在り方が問われていることを強調されました。

3番目の講演では、森本氏から「初等中等教育における生成AIの活用」のタイトルで、生成AIは教育現場での活用が進み、情報活用能力や主体的な学びの支援に役立つ一方、安易な利用による学びの本質喪失や評価の形骸化への懸念も指摘されていること。適切な活用例・不適切な活用例を具体的に示し、AIを「学びの仲間」として活用する意義や、教師・生徒双方のリテラシー向上の必要性、教育現場でのガイドライン整備の重要性について情熱溢れる講演をされました。

4番目の講演では、伊藤氏から「ゲームAI研究の進化と展望」のタイトルで、チェスや囲碁などのゲームAIの進歩は評価関数の機械学習の進化であったこと、ディープラーニングや強化学習などの技術革新が急速に進展していること。また、AlphaGoやAlphaZeroなどの事例を通じて、AI研究の歴史的意義や社会への応用可

能性、今後の課題と展望を解説され、AI技術の進化がゲーム分野にとどまらず、広範な分野への波及効果を持つことも指摘されました。

いずれの講演にも多くの質問や考えをいただき、満足度の高いフォーラムとなりました。

今後も目黒会の社会貢献事業としてタイムリーでかつ有益な情報提供の機会を設けていきます。朝日新聞（2025年9月30日）には、「AIは、業務効率化や新しい価値の創造など、大きな可能性がある一方、リスクもあります。」と社としてのAIに関する考え方を発表しています。これは我々がAIアプリを使う上でも基本であり、本講演会でもこの基本について、具体的に4つの分野の視点から考えると、有意義な機会になりました。

最後に、ご講演いただいた先生方やご参加の皆様、準備・運営に当たられた皆様に心よりお礼申し上げます。



市川類氏



福宮あやの氏



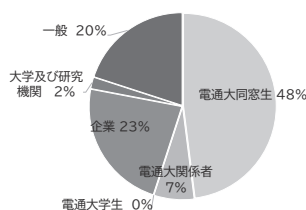
森本康彦氏



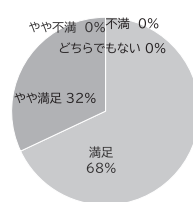
伊藤毅志氏

年	STFのテーマ
2025	AI
2024	ドローン
2023	デジタル教育
2022	再生可能エネルギー社会
2021	デジタル社会
2020	医工連携技術

参加者の割合



満足度アンケート結果



世界と日本のAI規制・ガバナンス政策を巡る最近の動向

東京科学大学 特任教授

市川 類



本講演では、世界と日本のAI規制・ガバナンス政策を巡る最新の動向について説明します。

まずは、AI規制・ガバナンスの枠組みについて、これまでの経緯を踏まえて説明します。一般的には、技術のイノベーションと制度としてのガバナンスは、互いに共進化しながら発展しますが、特にAI技術については、世界的にみると、AGIに対する将来的不安感から予防原則に基づき規制を行なおうとする動きがあることが特徴であり、また、このような傾向は、文化的な要因により地域差があることから、世界におけるAI規制・ガバナンス政策は多様性があります。その上で、生成AIの登場に伴い、2023年以降、AGIに対する将来的不安感が再燃し、各種の社会的リスクのみならず、特に最先端AIモデルの規制が大きな話題になりました。

その上で、世界のAI規制・ガバナンス政策を巡る最近の動向について説明します。全体的には、2023年以降、欧米各国は最先端AIモデルの規制強化の方向に進みますが、2025年に入ってから一転し、世界各国ともAIイノ

ベーションの推進の方向に舵を切ります。このような急速な政策の変化の要因としては、AI技術を巡る技術構造・産業構造の急速な変化があげられます。具体的には、米国では、トランプ政権のAI政策として打ち出されたAI行動計画で、米国第一主義が全面的に打ち出されるとともに、政権の価値観の強要への対応が話題となっています。欧州では、競争力強化策への転換の中で、AI大陸行動計画が発表される一方、既に成立した欧州AI法の規制とのジレンマが課題になっています。他方、AIを巡る米中対立の中で、中国では、自国内では社会主義の核心的価値観のための規制を導入しつつも、AIプラス行動計画を更にアップデートし、野心的な目標を掲げるとともに、多国間・国連主義の下で、世界各国との連携を図ろうとしています。

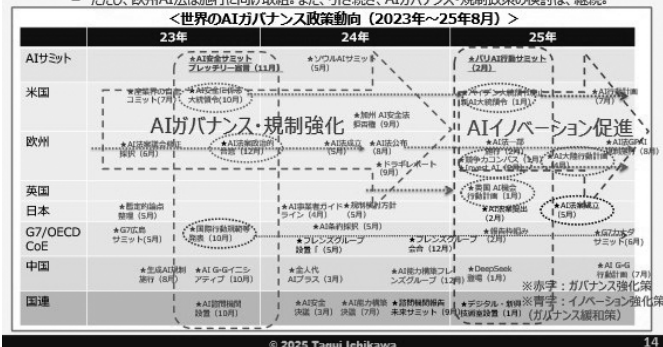
最後に、上述のような中で、日本のAI規制・ガバナンスを巡る政策動向について説明します。日本は、もともとイノベーション志向である点で欧米とは異なるとともに、米国とも欧州とも異なるという中立的な立場であり、国際的な相互接続性に積極的に取り組んできたこと

が特徴です。具体的には、生成AI登場後、国際的には広島AIプロセスを主導する一方、国内的には、法規制ではなく、自主的なガイドラインであるAI事業者ガイドラインを発表しています。また、上述の通り、欧米における最先端AIモデルの規制の動きの中、日本でも一時期規制の検討がなされましたが、最終的には、罰則などを伴わないいわゆる基本法であるAI法が2025年2月に閣議決定され、同年5月に成立しました。

■ 世界のAIガバナンス動向（2023年-25年前半）

- 生成AI登場後の23年秋以降、世界は、AIガバナンス・規制強化の方向に。
- 25年に入って、欧米を中心に、世界は、急速にAIイノベーション促進に政策転換。

ただし、欧州AI法は施行に向け取組。また、引き続き、AIガバナンス・規制政策の検討は、継続。



Animate-V Generate ― 著作権の現在地 ―

(一社) 日本アニメ・フィルム文化連盟 事務局長 福宮 あやの



「画像生成AI」が世間の注目を集めて僅か3年、ChatGPTなど総合型の生成AIとともに急速に普及し、今や世界中で利用されています。しかし、その根底を支える機械学習において、享受目的を伴わなければ著作物を無断利用できるといふ日本の著作権法の規定は大きな懸念を呼んでいます。

2023年のNAFCAによる調査では、アニメ業界従事者の73%が「(全部あるいは一部で)規制すべき」と回答するなど、強い問題意識が示されています。

一方で慢性的な人手不足のなか「アニメを生成AIで」と試みる企業も現れています。既存のアニメ作品を学習させて新しいアニメの制作に役立てる狙いです。

しかしここで問題となるのが著作権の所在です。

アニメ制作は製作委員会から下請け会社、フリーランスのアニメーターへと分業されますが、契約が不十分なまま進行することが多く、原画や動画の権利が誰に属するかは曖昧です。

著作権法では、著作権は「発意と責任を有するもの」にあると書かれてあるので、制作を担当したスタジオが著作権を持っていると読めます。

しかし現実はそのようになっていません。制作スタ

ジオは著作権の完全譲渡をほぼ無条件に受け入れおり、その結果アニメ業界はクリエイターに正当な利益が還元されない構造となってしまうのです。

著作権の所在は、生成AI以前から多大な問題を抱えていたのです。

日本動画協会および帝国データバンクの調査によると、2023年のアニメ市場全体の売り上げは3兆3465億円。一方、制作スタジオの市場規模は3390億円にとどまります。

これらの状況に、国連「ビジネスと人権」作業部会は「このままでは海外配信プラットフォームから不適切な取引実態を根拠に締め出される可能性がある」と警鐘を鳴らしています。さらに、アニメを形作るもう一つの要素、「声」と生成AIの問題も深刻です。

2024年10月、声優たちが「NOMORE 無断生成AI」と題した映像を公開しました。声は著作物ではないため法的保護が不十分で、様々な形で無断利用される事態が起きています。これに対し、日本俳優連合など三団体は①AI音声アニメや吹替に使わないこと、②学習・使用には本人の許諾を得ること、③AI生成音声と明示すること、を求めました。

現在これはただの「主張」にすぎませんが、広

く業界と社会に受け入れられ、実質的なガイドラインとなることを切に願っています。

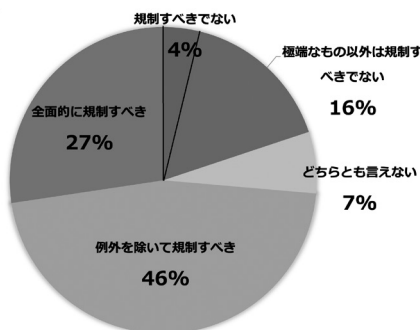
「Anime」の語源はラテン語「Anima」で「魂」の意味です。絵を動かすことで、魂・命を吹き込むことがアニメーションなのです。

一方の「Generate」は生成、利益・機会などの創出を意味します。似ているようで全く違う言葉ですね。

日本のアニメが、なぜ世界に評価されるのか。その本質を見据えた上で、生成AIの利用範囲を慎重に考え、クリエイターの権利とともに議論されることを強く願っています。

AIの使用に関する
規制について、
あなたはどのよう
に考えますか？

(2023年 NAFCA調査)



初等中等教育における生成AIの活用

東京学芸大学教授

森本 康彦



近年、初等中等教育においても生成AIの活用が急速に注目されるようになりました。とりわけ2023年度以降、文部科学省は「生成AIパイロット校」を指定し、児童生徒による生成AI活用についての実証的な取組を全国で展開しています。こうした動きを受け、文部科学省は2023年7月に「初等中等教育における生成AIの利用に関する暫定的なガイドライン」を公表し、2024年には改訂版を公開しました。このガイドラインでは、生成AIを児童生徒の学びの補助として活用する意義とともに、「生成AIの活用が、子どもたちの主体的な学びを奪うものであってはならない」という明確な姿勢が示されています。つまり、児童生徒が生成AIを学びに活用するための鍵は、主体性と学び方にあります。

本発表では、生成AIを「教師の代替」として使うのではなく、学習者自身が学習状況に応じて「仲間」や「先生・先輩」として生成AIの役割を切り替えながら問題解決に取り組む学び方を紹介し、その実践事例を報告します。

現代の子どもたちは、唯一の答えのない問いに向き合い、試行錯誤し、壁を乗り越える中で

成長しています。生成AIは、そのプロセスにおいて、思考を広げ、深めるための新たな道具となります。ただし、生成AIには限界もあります。言葉の意味を理解して考えているわけではなく、あくまで確率的に最もらしい応答を生成する仕組みであるため、間違いや誤解を含むこともあります。だからこそ、学習者が生成AIの特性を理解した上で、目的に応じて役割を切り替えながら活用していくことが求められます。

本発表では、児童生徒が「生成AIを仲間として使うとき」「先生・先輩として使うとき」「受動的に使ってしまうとき」の違いを明確にし、適切な活用を促すための仕掛けとして「学習進行マップ（学びのシグニファイア）」を紹介します。これは、生成AIとの関係性を子ども自身が自覚的に選択し活用するためのツールです。

ここでは、小学校第6学年の総合学習の様子を紹介します。あるグループでは、議論に行き詰まった際に生成AIを「仲間」として活用し、参考意見を得て問題解決を前進させる様子が、一方、別のグループでは学習の進め方に迷った場面で生成AIを「先生・先輩」として活用し、方向性の助言を得て課題に再挑戦している様子

がみられました。いずれも、児童生徒が生成AIの役割を自分で判断し、切り替えていた点が特徴的です。

生成AIを活用した学びにおいて重要な4つの視点として、(1)学習者が主体的であること、(2)問題解決が繰り返され一連の活動であること、(3)学習者が学びの責任者になること、(4)生成AIを学びのeパートナーとして用いること、が挙げられます。これらを踏まえ、子どもたちが生成AIとの関係を柔軟に構築しながら学びを展開していくことが、次代のアクティブラーナーの育成につながると考えています。

生成AIを活用した学びの4ヶ条

- ✓ 学習者が主体的であること
- ✓ 問題解決が繰り返され一連の活動であること
- ✓ 学習者が学びの責任者になること
- ✓ 生成AIを学びのeパートナーとして用いること



ゲームAI研究の進化と展望

電気通信大学教授

伊藤 毅志



本講演では、まずはゲームAI研究の歴史から最新の展望までを概観し、その意義と課題を整理します。チェスや将棋、囲碁といった思考ゲームは、ルールが明確で勝敗が定量化できるため、人工知能の評価に適した題材として研究されてきました。探索、推論、学習など人工知能の主要要素を含み、認知科学とも深く関わるため、理論と実践の双方で重要な役割を担ってきました。

チェスAIは18世紀の「トルコ人」から始まり、20世紀後半に急速に発展しました。1997年にはIBMのDeep Blueがカスパロフを破り、膨大な探索能力が人間を凌駕することを実証しました。将棋では、探索と評価関数設計が大きな課題でしたが、2006年のBonanzaに代表される機械学習による評価関数自動生成が革新をもたらしました。その後「あから2010」などの成果を経て、2010年代半ばにはプロ棋士に勝つレベルに到達しました。

囲碁は合法手の多さや石の評価の難しさから長らく難攻不落とされましたが、2006年の

モンテカルロ木探索(MCTS)の導入により大きく進展しました。そして2016年、Deep MindのAlphaGoがディープラーニングと強化学習を組み合わせ、李世ドル九段を破ったことはAI研究における画期的成果でした。さらにはAlphaZeroやMuZeroでは、将棋やチェス、さらにはAtariゲームにまで応用を広げ、汎用ゲームAIの実現可能性を示しました。

このように、チェスは探索、将棋は探索と機械学習、囲碁はMCTSと深層学習の融合という異なる技術的ブレイクスルーによって人間を超えてきました。しかし、これらは必ずしも「強いAI」ではなく、ゲームの意味を理解しているわけではありません。依然として「弱いAI」の範疇にあり、今後は不完全情報ゲームやコミュニケーションを含む複雑な状況での応用が課題となります。

さらに、人間を超えるAIの社会的影響も無視できません。AIが仕事や役割を奪うのではないかという懸念がある一方で、人間とAIが分業や協働を通じて知を拡張し、新たな創造的

活動に挑む可能性も広がっています。ゲームAI研究は単なる競技の勝敗を超え、人間とAIの共生のあり方を考えるための優れた実験場であり続けています。本講演では、ゲームAIを通して、AIの課題についても考察していきます。

ゲームAI研究の進化と展望



人知を超えたゲームAIと人間の新しい関係

- ・拒否反応
- ・受け入れから共存へ
- ・AIから学ぶ
- ・新たな次元へ

“ 変革の時代－ 電通大卒業生活躍の チャンスが増大 ”

2025年同窓会賞受賞者

津田 邦和 氏

1990年前後から現在に至るまで、コンピュータと通信世界は、まさに激動の35年でした。現在では国家的テーマであり、産業競争力の重要要素、AIですらも通信とコンピュータの発展の中で現在の状況になったともいえるのではないのでしょうか。

そのような中で、私が1996年にクラウドコンピューティングに携わったきっかけ（具体的には政府官僚や大手ベンダー、シンクタンク等々に技術と市場変革について説明を始めた）は、友人たちとの討議の中から「よくわからないベールの向こうに何かがあるそう」というはやっとした興味からでした。もちろんクラウドという言葉はその翌年1997年に言われ始めたもので、まだカテゴリーやイノベーションの実態も明確ではなく「ネットコンピューティング」とでもいべきなのかと議論していた時期でした。議論できる人たちも、通信とコン

ピュータの両面からだけで、本当に人口が少なかった記憶があります。

そこで電気通信大学及び大学院のポジショニングですが、おそらく国内唯一でかつ世界でも珍しい大学で、50年に渡って通信とコンピュータの両方に触れられる大学だったことと、まだまだ続く通信とコンピュータの変革の中で卒業生が活躍するチャンス、踏み込んで言うとうと世界をけん引することも不可能ではないということです。

もちろん1974年に私が電気通信大学を選んだのは、本当に理解していたわけではなく、なんとなくよさそうという程度のことでした。

私の例で申し上げますと、電気通信大学と大学院で通信とコンピュータにまたがる、いわゆる業界的なことに触れていたことから、卒業後に特許や論文、さらにクラウドとデータセンターの開発・新技術提案ができたということでした。当時の大学と先生・先輩方には感謝の意を捧げたいと思います。

電気通信大学と大学院の諸君は、世界でもまれな環境にいると思います。ぜひ、この環境を生かしてほしいことから、2つのことを申し上げます。

第一に、学部の卒論や修士・博士論文のテーマは絞り込みが必要ですが、変革・イノベーションは業界的に発生する例が多くなります。そこでいろいろな分野に首を突っ込むことも将来の糧になります。実は学生時代に、「いろいろ手をつけると器用貧乏になるぞ」と忠告されたことがあります。私の体験ではそうではなかったというのが事実です。

第二に、「従来の考え方ではおかしいこと」「関係性がないように思えること」も、イノ

ベーション時代には重要になることがあります。もうすぐ2ナノの半導体が量産されます。ラビダスだけではなく世界の半導体ベンダーで加速しています。さらに量子コンピュータもあつという間に実験レベルを脱するでしょう。通信世界もクラウド世界も大きく変わります。当然皆さんの活躍の場は大きく広がることでしょう。何が変わるのか。学内の友人たちとの議論や、気になる講座の聴講に励んでください。

電気通信大学の諸君の活躍、世界をけん引する人材になることを祈念しています。全員に可能性があると思います。



【受賞内容】

日本のクラウドサービスの黎明期からビジネス創出と人材育成に尽力し、「日本のクラウドの父」と称される。政府のクラウド推進政策にも関与し、業界の発展に貢献。データセンターの省エネ技術の研究にも取り組み、持続可能なITインフラの構築に寄与した。

【略歴】

1978年 電気通信大学電気通信学部経営工学科卒業
同年 株式会社リコー入社 新規事業開発部リーダー等歴任
1999年 NPO・ASP インダストリー・コンソーシアム・ジャパン設立 常務理事 技術部会長
2007年 NCRI株式会社設立に参加 オーナー
2008年 任意団体・ネットコンピューティングアライアンス代表
2014年 電気通信大学大学院情報システム設計学専攻博士後期課程修了
2020年 NCRI株式会社 代表取締役社長
2024年 NCRI株式会社 会長 現在もデータセンターとクラウド基盤開発に直接携わる

トピックス

国際ロボット競技大会 参加報告

電気通信大学情報理工学域2年

中野 湧

私は、2025年7月にブラジル・サルヴァドールで開催された国際ロボット競技大会「RoboCup 2025 Salvador」に出場しました。この度、目黒会の同窓会誌に大会出場についてご寄稿させていただける機会をいただきました。日本代表チームの一員として参加した貴重な経験について、少しばかりではありますご紹介させていただきます。

大会の概要

「RoboCup」は、2050年までに人間のサッカー世界チャンピオンチームに勝てるロ

ボットチームを作ることを目標に掲げた、国際的なロボット競技大会です。サッカー競技はもちろんですが、他にも、家事ロボットやレスキューロボットの競技などもあり、試合だけでなく、ロボットについてのポスター発表やプレゼンテーションなども審査の対象となります。私は今回、19歳以下を対象としたジュニアリーグのSoccer Openという競技に出場しました。この競技は2台の自律型ロボットがオレンジボールを追いかけて、相手ゴールにシュートを決めることで得点を競うものです。カメラなどを用いた高精度なボール検出技術や、それを基にした自動制御技術が勝敗を分ける鍵となります。

大会出場のきっかけ

私がこの大会を知るきっかけになったのは小学生の頃に地元の科学展で見た、ボールを賢く追いかけるロボットでした。そのロボットを製作したのが後に私が進学することになる高校の部活動でした。私は、その部活動でロボットを製作してみたいと思うようになり、晴れてその高校に進学し、その部活動に入学することができました。顧問の先生や先輩方から技術を学び、高校1年生の時、初めてこのロボットのサッカー競技に挑戦しました。

これまでの歩み

「RoboCup 2025 Salvador」は「RoboCup」の大会における世界大会にあたり、出場するためには、国内予選を勝ち抜く必要が

あります。高校入学後、双子の兄とチームを組み、国内予選から世界大会出場を目指す日々が始まりました。高校1年生の時は、赤外線を発光するボールを使用するサッカー競技で、地方大会を勝ち抜き日本大会まで駒を進めることができましたが、上位入賞はかないませんでした。高校2年生からは今回出場した競技であるSoccer Openに挑戦しました。この年も日本大会では思うような結果を残せず、大学で再挑戦することを誓ってそれぞれの進路に進みました。

そして迎えた今回のシーズンは、私の選手として最後の年でした。これまでの経験から、ただ強いロボットを作るだけでなく、新しい技術にも積極的に挑戦しました。特に3台のカメラと魚眼レンズ、広角レンズを組み合わせた独自の探索システムは、日本で主流の手法とは一線を画すものでした。日本大会では順位こそ振るいませんでしたが、「革新的なビジョンシステムを開発し実用化した」と講評をいただき、その他の果敢な挑戦も併せて評価され、「優秀プレゼンテーション賞」「審査員特別賞」「スポンサー賞」を受賞することができました。

今回の日本大会では海外チームが優勝したことから、世界大会の出場は、やや希望が見える程度で、正直なところ諦めかけていました。しかし、大会後しばらく経って、一通のメールが届き、それは世界大会の出場権獲得を告げるものでした。実は今シーズン、世界大会がブラジルで開催されるということで、

渡航費や安全面への懸念から出場を辞退したチームが複数あったため奇跡的に私たちにチャンスが巡ってきたのです。

大会当日

大会では試合だけでなく、他チームと協力する「スパーチーム」という競技や、異種混合競技などが行われました。試合では初日から激しい接触でタイヤが外れるといった不測の事態に悩まされました。ペナルティにつながる致命的なトラブルで、思うように力を



出すことができませんでした。その日はホテルでトラブルの解消に全力で取り組み、他の日本チームの方にも相談しながら、固定具の変更や接着剤を変えるなどの調整をし、2日目には試合直前でのタイヤの再固定により試合中はほぼ外れることはありませんでした。一方で、トラブルの解消によりロボットがコート上で動いている時間が長くなったことから、調整日や1日目では気づかなかったプログラムの甘さが露呈しました。接戦が増える一方で、コートの端を検出できなかったり、試合



開始を告げるスタート信号を適切に受信することができなかったりと、山積みの課題に悩まされました。結果として20チーム中16位という悔しい結果となりました。

しかし、技術的な苦労以上に、かけがえない経験ができたのも事実です。世界中からの参加者と英語で技術的な会話や文化交流を楽しむことができました。スパーチームでは、異なる国籍のメンバーと作戦を練ったり、私たちのロボットがゴールを決めたときは一緒に歓声をあげたりと、国境を越えた一体感を味わうことができました。また、部品が簡単に手に入らない制約の中で、試行錯誤を繰り返しながらトラブルを解決できたことは、困難な状況でも努力し続けることの大切さを感じる場面でした。また世界大会で出会った様々なロボットは、性能や部品・空間の使い方、戦略が、想像を遥かに超えてとても洗練されたもので、何事にも広い視野を持つことの重要性を再認識しました。

最後に

今回の経験は、私にとって貴重な財産となりました。出場にあたっては、電気通信大学をはじめ、多くの方々にご支援いただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。世界大会への挑戦は、私に未知の世界へ飛び込む勇気を与えてくれました。今回の経験を胸に、今後もロボット技術や研究活動において、果敢に新しいことに挑戦していきたいと思っています。

学会参加費助成支援

学生英語発表にかかる学会参加費助成は、目黒会及び電気通信大学基金からの支援を財源とし、電気通信大学に在籍する学生及びポスドクの英語による研究成果の発表に対し、学会参加費を助成します。本助成は、2021年度から開始しており、電気通信大学における国際交流活動を推進するとともに、国際的な舞台において英語を用いた研究成果の発信、世界の研究者から知見を得ることにより、国際感覚の醸成、研究力の向上を図ることを目的とします。

対象者は、目黒会学生会正会員又は目黒会正会員（ポスドク）とします。学会開催形式は、国内学会又は国際学会における対面形式を対象とします。

助成額は英語による研究発表を行う学会参加費の実費（海外渡航あり（上限6万円）、海外渡航なし（上限4万円））を支給します。

2025年度については、下記の12名を採択いたしました。

1 秋葉 優馬（情報学専攻M2）

指導教員：梶本 裕之 発表形式：海外／現地発表 開催地：韓国
 開始日：2025/7/8 終了日：2025/7/11
 会議名：IEEE World Haptics Conference 2025
 論文タイトル：Force Rendering via Electrical Stimulation of Fingernail and Finger Pad
 助成額：60,000円

2 坂本 泰清（情報学専攻M1）

指導教員：梶本 裕之 発表形式：海外／現地発表 開催地：韓国
 開始日：2025/7/8 終了日：2025/7/11
 会議名：IEEE World Haptics Conference 2025
 論文タイトル：Displaying Sense of Adhesion by Electro-tactile Display
 助成額：55,918円

3 小野田 響（情報学専攻M1）

指導教員：梶本 裕之 発表形式：海外／現地発表 開催地：韓国
 開始日：2025/7/8 終了日：2025/7/11
 会議名：IEEE World Haptics Conference 2025
 論文タイトル：Pain masking by contextual modification in VR/AR environments
 助成額：55,918円

4 移川 春音（情報・ネットワーク工学専攻M1）

指導教員：李 鯤 発表形式：海外／現地発表 開催地：オーストラリア
 開始日：2025/8/17 終了日：2025/8/22
 会議名：The 2025 URSI Asia-Pacific Radio Science Conference
 論文タイトル：Characterization of LF Band Underground Wireless Communication Using Principal Component Analysis Method
 助成額：60,000円

5 上田 有真（情報・ネットワーク工学専攻M1）

指導教員：李 鯤 発表形式：海外／現地発表 開催地：オーストラリア
 開始日：2025/8/17 終了日：2025/8/22
 会議名：The 2025 URSI Asia-Pacific Radio Science Conference
 論文タイトル：A Machine Learning-Based Method for Thermal Parameter Estimation in MMW Exposure
 助成額：60,000円

6 中村 亮介（情報学専攻M2）

指導教員：江木 啓訓 発表形式：海外／現地発表 開催地：スウェーデン
 開始日：2025/6/22 終了日：2025/6/27
 会議名：The 27th International Conference on Human-Computer Interaction
 論文タイトル：Analyzing Changes in Participants' Thinking During a Discussion by Examining the Abstractness Distribution of Words in Their Pre and Post-Discussion Memos
 助成額：60,000円

7 森嶋 孝行 (基盤理工学専攻M2)

指導教員: 中村 淳 発表形式: 海外/現地発表 開催地: タイ

開始日: 2025/6/25 終了日: 2025/6/27

会議名: The 31st PPC Symposium on Petroleum, Petrochemicals, and Polymers and The 16th Research Symposium on Petrochemical and Materials Technology

論文タイトル: Systematic Variation of Oxygen Reduction Reaction Activity with the Number of Nitrogen Dopants in Iron Azaphthalocyanine

助成額: 8,270円

8 秋濃 航太郎 (情報学専攻M2)

指導教員: 山田 哲男 発表形式: 海外/現地発表 開催地: アメリカ合衆国

開始日: 2025/6/21 終了日: 2025/6/24

会議名: The 34th International Conference on Flexible Automation and Intelligent Manufacturing

論文タイトル: Demand and Capacity Sharing Decisions and Protocols in Multi-Microgrid Using Deep Learning

助成額: 60,000円

9 高橋 昇汰 (機械知能システム学専攻M2)

指導教員: 小泉 憲裕 発表形式: 海外/現地発表 開催地: ドイツ

開始日: 2025/6/17 終了日: 2025/6/20

会議名: 39th International Congress and Exhibition on computer assisted radiology and surgery

論文タイトル: Development of an efficient organ search method for ultrasound diagnosis robots

助成額: 60,000円

10 藤井 樹 (機械知能システム学専攻M2)

指導教員: 小泉 憲裕 発表形式: 海外/現地発表 開催地: ドイツ

開始日: 2025/6/17 終了日: 2025/6/20

会議名: 39th International Congress and Exhibition on computer assisted radiology and surgery

論文タイトル: Binary Classification of Liver Sides Roughness in Ultrasound Images Using Transformer and CNN Models with StyleGAN3 Data Augmentation

助成額: 60,000円

11 高橋 和雅 (機械知能システム学専攻M2)

指導教員: 森重 功一 発表形式: 国内/現地発表 開催地: 沖縄県

開始日: 2025/12/1 終了日: 2025/12/5

会議名: The 11th International Conference on Leading Edge Manufacturing in 21st Century

論文タイトル: Evaluation of the Effect of Lead Angle in Machining with Barrel End Mill

助成額: 25,000円

12 熊川 千寛 (機械知能システム学専攻M2)

指導教員: 森重 功一 発表形式: 国内/現地発表 開催地: 沖縄県

開始日: 2025/12/1 終了日: 2025/12/5

会議名: The 11th International Conference on Leading Edge Manufacturing in 21st Century

論文タイトル: Development of Five-Axis Controlled Tool Path Interpolation Method for Variant Shape Tools

助成額: 25,000円



したが、毎日NHKやBBCの英語教材で学習を重ね、想定される質問への回答を準備するなど入念に対策し、当日に臨みました。学会会場では、世界中から第一線の研究者が集い、口頭発表やデモ展示

この度は、目黒会並びに電気通信大学基金からの温かいご支援を賜り、心より御礼申し上げます。皆様のご支援のおかげで、この度、触覚分野における最高峰の国際会議の一つである「IEEE World Haptics Conference 2025」に参加し、研究成果を発表する機会を得ることができました。私の研究テーマは「文脈変化を用いた痛みのマスキング」というもので、痛み刺激の原因となる対象の視覚的な見た目を不快でないものに變化させることで、刺激に伴う不快感を低減させる研究です。発表や質疑応答は全て英語で行われるため、当初は大きな不安がありま

小野田 響 情報学専攻 M1
論文タイトル: Pain masking by contextual modification in VR/AR environments

REPORT1

を通じて活発な議論が交わされており、大変刺激的な環境でした。多くの方に自身の研究へ関心を持っていただき、将来の実験に繋がる貴重なご意見や、他の知覚研究者の方々からの新たな知見を得ることができ、今後の研究への展望が大きく開けました。特に、海外の研究者がデモや発表に対して積極的に質問する姿勢は、今後の自身の研究活動において大いに見習いたいと感じております。今回の貴重な経験を糧とし、今後は異なるコンテンツや痛み刺激パターンを用いた検証を進め、研究をさらに発展させてまいります。皆様からのご支援がなければ、このような貴重な機会を得ることはできませんでした。改めて、心より感謝申し上げます。

REPORT2

中村 亮介 情報学専攻 M2

論文タイトル: Analyzing Changes in Participants' Thinking During a Discussion by Examining the Abstractness Distribution of Words in Their Pre and Post-Discussion Memos

この度は目黒会の学会参加費助成により、二〇二五年六月二二日から二〇二五年六月二七日までスウェーデン・ヨーテボリの Gothen Towers で開催された The 27th International Conference on Human-Computer Interaction



HCII 2025)に参加し、口頭発表を行いました。発表題目は Analyzing Changes in Participants' Thinking During a Discussion by Examining the Abstractness Distribution of Words in Their Pre and Post-Discussion Memos であり、意見のメモに含まれる単語の抽象度を用いて議論が学習者の思考に与える影響の分析を行い、採択されました。HCII 2025 は発表件数が約二四〇〇件と非常に大規模な国際会議でしたが、今回国際会議に初めて参加・発表をしましたが、英語で自分の研究を説明するという経験を積むことができました。また、他の研究者の発表では積極的に質問を行うことにより、自身の研究における考えを洗練することができたと確信しています。今回の国際会議で得られた経験をもとに、協調的議論における介入に焦点を当て、研究を引き続き行いたいと考えています。ご支援、重ねて厚く御礼申し上げます。

REPORT3

森嶋 孝行 基盤理工学専攻 M2

論文タイトル: Systematic Variation of Oxy-

gen Reduction Reaction Activity with the Number of Nitrogen Dopants in Iron Azaphthalocyanine



この度、目黒会の多大なるご支援を賜り、先日タイ王国・バンコクにて開催された「PPC & PETROMAT Symposium」において、私が長年取り組んでおります燃料電池用触媒、特に鉄フタロシアニンに関する研究成果を発表する機会を頂戴いたしました。皆様の温かいご支援に、心より感謝申し上げます。振り返れば、学部時代から一貫してこの研究テーマに向き合っておりましたが、時に研究の方向性を見失い、立ち止まることもございました。しかし、その都度、原理に立ち返り、基礎から再構築することで、今回の発表に至る道を切り拓けたと確信しております。また、研究室配属当初は先輩方の高度な研究内容に圧倒されるばかりでしたが、今回の学会を通して、自身の専門とは異なる分野の研究であっても、その本質や課題を理解する力が培われていることを実感し、自身の成長を客観的に捉える良い機会となりました。現在、私は実験グ

ループと連携し、理論計算を用いて研究を推進しております。今後は、実験と計算の条件をより厳密に整合させることで、さらに精度の高い研究成果を追求していく所存です。末筆ではございますが、改めて皆様の温かいご支援に深く感謝申し上げますとともに、今後も一層研究に邁進してまいります所存です。

REPORT4

秋濃 航太郎 情報学専攻 M2

論文タイトル：Demand and Capacity Sharing Decisions and Protocols in Multi-Microgrid Using Deep Learning



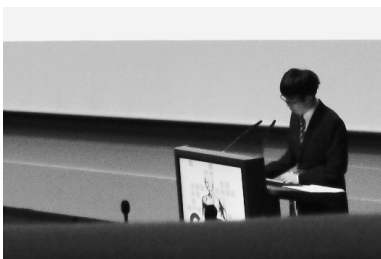
私は、6月に米国ニューヨーク開催のフレキシブル自動化・知的製造に関する国際会議FAIM2025で発表しました。これは、昨年度に国際共同研究でニューヨーク州立大学ビンガムトン校に6カ月間滞在した成果の発表で、深層学習の予測モデルとプロトコルベースの需要・供給量シェアリング管理モデルの統合した、複数ゲ

リッド間での再生可能エネルギー需給調整モデルの開発です。しかし、研究や長旅の疲れで寝坊したこと、電車の遅延により発表時間に遅れそうになったこと、さらにはファイル保存失敗によるスライドデータの紛失といったトラブルに見舞われ、対処に追われてしまいました。海外は日本と異なり不確実性が高く、今後は体調管理や事前準備を含めた自己管理の徹底が必要だと学びました。一方で、ビンガムトン校の研究者や学生との再会、日本からの10件の発表のオーガナイズで富山県立大学や東京理科大学をはじめとする日本の大学からの学生・教員参加により、同世代の研究者たちの挑戦姿勢に大変刺激を受け、私自身もより高い目標に挑戦する意欲が高まりました。今後は国際ジャーナルへの論文投稿や修士課程修了を目標に、より一層の研究に邁進してまいります。最後に、今年度と昨年度の国際会議への参加にあたり、二度に渡る経済的なご支援をいただいた目黒会に心より感謝申し上げます。

REPORT5

高橋 昇汰 機械知能システム学専攻 M2

論文タイトル：Development of an efficient organ search method for ultrasound diagnosis robots



この度、目黒会よりご支援を賜り、心より感謝申し上げます。皆様の温かいご支援のおかげで、国際会議にて研究発表を行う貴重な機会を得ることができました。私が今回発表を行った国際会議は、「39th International Congress and Exhibition on computer assisted radiology and surgery」で超音波診断の効率化のためのシステム構築についての発表を行いました。研究の過程では、度重なる試行錯誤やロボット制御の難しさに直面しましたが、指導教員や研究仲間からのアドバイス、そして皆様からのご支援が支えとなり、無事に発表に至ることができました。また、会議中の研究者との交流を通じて、他国の研究環境やアプローチ方法を学ぶことができ、これが今後の研究に活かせる貴重な学びとなりました。この発表を経て、さらなる研究の発展を目指し、研究内容の深化と社会への貢献に努めていく所存です。引き続き、皆様のご期待に応えられるよう尽力してまいります。改めまして、温かいご支援に心から感謝申し上げます。

大学には、大学公認の団体だけでも22の体育系サークル、20の文化系サークル、30の同好会サークルと合計72団体が活動しています。分野もジャンルもさまざまです。趣味や興味を共有できる仲間がいれば、新たな団体を立ち上げることも可能です。目黒会では学生正会員向けの活動支援の一環として学生サークル活動支援を2018年度から実施しており、1サークル当たり年間の活動補助金として2万円(上限)を交付しています。実施にあたっては、学生自身で組織運営している学友会と連携をとりながら活動支援を進めています。目黒会は皆様方個別のサークルと交流の輪を広げ、この活動を通じて同窓生と在学生との連携協力を図っていきたいと考えております。2025年度については、下記の15サークルの支援を決定致しました。

2025年度支援学生サークル一覧

体育系サークル

陸上競技部

代表者／曾禰 雄太郎 設立／1965年 メンバー数／59名

水泳部

代表者／赤塚 朔 メンバー数／20名

柔道部

代表者／湊 崇将 メンバー数／11名

軟式庭球部

代表者／奈良部 聖人 設立／2000年 メンバー数／26名

アメリカンフットボール部

代表者／木村 知那 設立／1988年 メンバー数／45名

合気道部

代表者／守真 結子 設立／2005年 メンバー数／24名

文化系サークル

ウインドアンサンブルオーケストラ部

代表者／松平 凌人 設立／1986年 メンバー数／45名

グリークラブ

代表者／本間 俐圭 設立／1958年 メンバー数／14名

写真研究部

代表者／藤原 寛都 設立／1955年 メンバー数／44名

放送研究会

代表者／小石 悠真 設立／1965年 メンバー数／27名

無線部

代表者／小山 有吾勝美 設立／1991年 メンバー数／62名

天文部

代表者／野村 拓夢 設立／1991年 メンバー数／50名

同好会サークル

国際交流会 (ICES)

代表者／矢筈原 優 設立／2015年 メンバー数／34名

U.E.C.wings (鳥人間サークル)

代表者／遠藤 舜也 設立／2001年 メンバー数／20名

バーチャルライブ研究会

代表者／須山 凌 設立／2017年 メンバー数／235名

学生サークル活動支援



グリーククラブ

電気通信大学グリーククラブは、現在、男子5名、女子9名の計14名で活動している混声合唱団です。

練習は、毎週火・木・土曜日の週3回行っています。火曜日と土曜日は学生による指導や常任指揮者の先生のご指導をいただき、技術を磨いています。木曜日は自主練習日として、個人やパートごとの課題に取り組んでいます。

混声合唱を通じて、男女問わず分け隔てのない仲の良い雰囲気の特徴です。部員の多くは合唱未経験者ですが、基礎的な発声練習からの丁寧な指導と充実した練習環境のおかげで着実に成長し、完成度の高い演奏を披露できるようになっています。

一年を通しての最大の目標は、定期演奏会を成功させることです。私たちは、聴きに来てくださる方々に感動や喜びをお届けすることを大切にしています。同時に、私たち自身が合唱を楽しんで行うことも重視しており、そのために日々の練習に真剣に取り組み、一人ひとりが全力で歌声を磨いていきます。

最後に、私たちの活動を日頃からご支援いただいている皆様に、心より感謝申し上げます。今後も電気通信大学グリーククラブをどうぞよろしくお願いいたします。



国際交流会（ICES）

ICES (International Cultural Exchange Society) は、日本人学生と留学生との交流を目的とした国際交流サークルです。毎週水曜日には第一体育館にてバスケットボールやバドミントンなどのスポーツ活動を行ない、金曜日には部室でボードゲームや映画鑑賞会を実施しています。

これらの活動を通じて、留学生と日本人学生が気軽に顔を合わせ、学年や国籍を問わず交流を深められることを目標にしています。英語力に自信がなくても安心して参加できる、和やかな雰囲気の特徴です。

また、季節ごとのパーティーや文化イベント、大学の国際ウィークに合わせた企画など、様々な活動を行っています。今年5月には大学と協力して「International Day」を開催し、民族衣装の紹介や各国ブース、パフォーマンスなどを通して、多くの学生に国際色豊かな交流の場を提供しました。

ICES は国際交流や留学に関心のある全ての学生に開かれたコミュニティ

ニティです。今後も、日本人学生と留学生の架け橋となるよう、活動に励んでまいります。

最後に、日頃から温かいご支援をくださる皆様にこの場を借りて心より感謝申し上げます。



目黒会グループ会のご案内

電気通信大学同窓生の多くの皆様がグループの活動を通じて同窓生交流を深める活動をされております。目黒会は「目黒会グループ会」という連携窓口組織を設け、グループとの情報交流を進めております。グループ会に登録されれば、活動補助金の交付とあわせて、同窓会誌や目黒会ホームページでグループ活動が紹介されますので、是非ともグループ会への登録をお願い申し上げます。

グループ会のご案内



楽しむ / 予定



楽しむ / 報告



目黒会グループ会登録一覧（2025年9月30日現在。カテゴリー別登録順。現94グループ）

NO	グループ名	メンバー数	代表者
〈研究室同窓会〉			
1	古荘研究室OB・OG会	19	仁科 雅弘
2	IEゼミ *1	552	志賀 智一
3	ヒトヨシ会（坂本和義研究室同窓会）	252	水戸 和幸
4	長森研OB会	25	金子 文雄
5	尾内・林研究室 OBOG 会	50	簡石 賢央
6	小島研OB・OG会	44	小島 年春
7	萩野研OB・OG会	200	高木 国男
8	田中基康研究室	45	田中 基康
9	石川・結城研究室OB会	317	結城 宏信
10	江木研究室同窓会	20	江木 啓訓
11	明・佐藤研究室OBOG会	500	下条 誠
12	水戸研究室同窓会	98	水戸 和幸
13	奥野研究室同窓会	12	極檀 紘希
14	小池研同窓会	99	小池 卓二
15	柏原昭博研究室同窓会	20	後藤 充裕
16	角田・赤池研究室同窓会	230	石原佐和子
17	山本佳世子研究室同窓会	23	金井 治樹
18	三木・来住研OB・OG会	8	松浦 基晴
19	山藤研同窓会	9	三宅 基夫
20	植野研究室同窓会	60	宇都 雅輝
21	宇都研究室同窓会	22	宇都 雅輝
22	通機会（機械系研究室卒業生）	500～1000	小柳 洋
23	梶本研究室同窓会	20	梶本 裕之
24	美濃島・浅原・加藤研究室同窓会	52	加藤 峰士
〈企業同窓会〉			
1	電気通信大学企業家懇話会（略称：EATEC（イーテック））	52	藤崎 正範
2	松下調布会関西	42	吉田 純
3	JR東日本目黒会	113	浦壁 俊光
4	シャープ目黒会	20	宮澤 友和
5	IHI電通大OB・OG会	78	原 祐樹
6	AT-UEC会（NTT-AT社内OB会）	95	高橋 真之
7	ドコモ目黒会	130	安部 成司
8	3M電通大OB & OG会	19	大橋 学
〈サークル同窓会〉			
1	素光会（剣道部同窓会）	286	木村 裕之
2	自動車部OB会	80	中川 悟
3	ラグビー部OB会	200	小宮 幹夫
4	ワンダーフォーゲル部OB会	170	小柳 洋
5	ヴェルテン会（管弦楽団OB S33年代）	22	兒玉 敦行
6	陸上競技部後援会	109	小野寺 順
7	英会話部OB・OG会	33	遠藤 直樹
8	硬式野球部OB会	164	西田 知弘
9	学友会執行委員会08,09 OB会	60	島崎 俊介
10	とり松友の会（管弦楽団OB S57卒）	22	竹田 智彦
11	ヨット部同窓会（黒艇会）	180	木下 敬裕
12	東洋哲学研究会同窓会	30	鯨井 源一
13	短大バスケットボール部OB会	50	羽角 和正
14	フェリシア会（競技ダンス研究部OB・OG会）	346	齋藤 和夫
15	柔道部OBOG会	20	淵 佑介
16	軟式野球サークルたまあ〜ずOB会	100	石橋 融
17	体育会バレーボール部 OB・OG会	100	大和いずる

NO	グループ名	メンバー数	代表者
18	海洋部OBとその仲間たち	20	麻田 直人
19	親岳会（短大山岳部）	29	坂本 薫
20	グリークラブOB会	476	宮本 美則
21	ゴルフ部OB・OG会	80	赤澤 隆
22	バスケットボール部とげぬき会	45	水町 佳宏
23	WEO 卒業生楽団	15	山崎 智樹
〈同期会・クラス会〉			
1	S40Sクラス会	33	羽生 利通
2	RB38年入学クラス会	37	津田 宏
3	六八会（1968年短大入学同期会）	60	勝本 研一
4	S50Dクラス会	32	今井 高介
5	S44 T 入学クラス会	29	渡邊 隆一
6	UEC御宿友の会（S35卒同期会）	20	中村 善明
7	S1966会（S41年入学S科クラス会）	23	塩澤 和夫
8	S52卒仲間の同期会	13	小林 俊英
9	S38Eクラス会	31	木村 光昭
10	電通大40Tクラス会	31	三木 哲也
11	60Tクラス会	39	原 裕樹
12	52D同期会	13	渡辺 一夫
13	48R同窓会	40	菅野 政孝
14	P50卒クラス会	35	角田 吉規
15	電通大36Bクラス会	28	岡崎 宏
16	ハムの会（S37通信機械工学科入学生同期会）	29	久野 輝夫
17	短大70年代友人の会	40	山下 久雄
18	31B（通信経営科）クラス会	10	小林 範久
19	S31通別クラス会	15	佐藤 謙二
20	60N同窓会	25	中里 明子
21	通信工学科68年同期会	34	中村 達
22	S41入学/S45卒業Eクラス会	36	早川 和彦
23	53C同期会	61	関 和郎
24	64E入学同窓会（64年入学電子工学科の会）	15	小沼 博
25	UEC73R同窓会	33	大家 万明
26	73年卒業M科OB会	20	中山 良一
27	M1995&1996入学クラス会	7	中田祐美恵
28	1978S科入学同期会	22	佐々木浩幸
29	73Eクラス会	8	宝槻 稔
〈地域・趣味・その他〉			
1	電気通信大学技術士会	49	遠峰 徹
2	UEC WOMAN 女子会	200	岩本 茂子
3	小田急沿線（OER）気楽な会	59	春日 正好
4	電通大無線の会	110	高橋 真之
5	おもちゃの病院	18	山森 信生
6	電気通信大学 沖縄県人会	21	島崎 俊介
7	子ども作文研究会 *2	12	石川 良教
8	ひよっこ技術者交流会	10	森 健太
9	Mexico-UEC	25	中野まり子
10	双乃会（そうだいかい）。特許・知的財産関連の従事者の集まり	398	志水 英貴

*1 平島正喜研究室、長谷川伸研究室、林泉研究室、御子柴茂生研究室、志賀智一研究室の教員及び卒業生

*2 キャリア教育の現・元特任講師による子ども国語教育研究会作文指導教室

梶本研究室同窓会

梶本研究室は2007年に創設され、最初の卒業生を送り出してから16年以上が経過しました。当初は人間コミュニケーション学科・専攻からスタートし、大学の改組に伴って総合情報学専攻、情報学専攻となって現在に至っています。現在までに博士課程卒業生が14名、修士課程卒業生が52名、学部卒業生が13名となっています。卒業時には必ず卒業番号が刻印された名刺入れを渡しています。

研究分野は触覚を中心としたバーチャルリアリティやヒューマンインタフェースです。人どのように「触った」感覚を提示するか、というエンジニアリングから、人の触覚メカニズムはどのように働くのか、というサイエンスまで幅広く研究を行っています。

研究室卒業生との交流は、現在はStackにて行っています。研究室運営用のStack内にalumniチャンネルを作成し、卒業生はシングルチャネルゲストとしてこのチャンネルに参加してもらうという形態です。企業に就職した後も関連した研究開発を続けていると、展示会や学会で卒業生同士が出会うこともあり、そうした際にはStackに写真が流れることも多いです。一つ目の写真は、先日韓国で開催された触覚に関する国際学会での集合写真です。写真に写っているうちの約半数が現役の研究室メンバーですが、残りが研究室の卒業生で、他大学

で研究者となっていたり、企業で研究・開発職についているメンバーです。

定期的な集まりとしては、例年調布祭の最終日のオープンラボの日に同窓会を開催しています。2025年は卒業生と現役合わせて30名近くが集まりました。同窓会は現状では研究室内で行っています。これはオープンラボのあとそのまま開催できるという利便性のほかに、卒業生にオープンラボに参加してもらい現在の研究を見てもらえるという利点があるためです。左下の写真では分かりにくいのですが、研究室の壁には1期生のころからの学会やコンテスト受



2025年7月に韓国で開催された国際学会 (World Haptics Conference) での卒業生と現役学生の記念撮影

賞時の賞状のコピーが掲示されており、このような形で歴史を残すことも卒業生にとって重要かと考えています。

同窓会はやはり比較的最近の卒業生が誘い合って多く集まる傾向にあります。現役学生にとっては企業の実態を知る貴重な機会となっており、学生が卒業生に会社関係の質問をする場面が多く見られました。

梶本研究室同窓会代表 梶本裕之

(電気通信大学情報学専攻教授)



調布祭最終日、オープンラボ後の同窓会の様子

グループ会報告／サークル同窓会

ゴルフ部OB・OG会

はじめに

ゴルフ部OB・OG会は、現役部員と卒業生との交流を目的として発足し、長年にわたり、現役学生主催によるゴルフコンペが毎年開催されてきました。

しかし、2000年頃にゴルフ部が廃部となったことにより、ゴルフ部OB・OG会の活動も途絶えてしまいました。しばらくしたのち、「卒業生同士の交流は続けたい」という有志の強い想いにより活動が再開され、中心メンバーの尽力のもと、現在まで継続・発展しています。

最近の主な活動内容

近年は、従来のゴルフコンペに加え、ゴルフに参加できない方にも交流の場を提供するため、東京都内での懇親会も開催しています。

また、ゴルフコンペでは、前日にゴルフ場近郊のホテルに宿泊し、近隣の居酒屋で前夜祭を行うのが恒例となっており、親睦を深める貴重な機会となっています。

以下の写真は、昨年度の活動の一コマです。

写真1…伊豆にらやまカントリークラブでのゴルフコンペ集合写真

写真2…東京駅八重洲口にある居酒屋での懇親会の様子

おわりに

現在、ゴルフ部卒業生の登録数は163名ですが、実際に連絡が取れているのはその半数以下となっており、年々、連絡が取れなくなる方が増えてきています。

一方で、目黒会発行の同窓会誌をきっかけにご連絡いただいた卒業生の方や、ゴルフ部にかりのあるゴルフ好きの電通大卒業生が参加されるなど、交流の輪は少しずつ広がりを見せています。

現在の主な連絡手段は、メーリングリストお



写真1



写真2

よびグループLINEです。このご案内が届いていない卒業生の方や、ゴルフ部OB・OG会にご興味のある方は、ぜひ左記連絡先までご一報いただければ幸いです。

より多くの皆さまとお会いできることを、心より楽しみにしております。

ゴルフ部OB・OG会代表

赤澤隆（1980年機械工学科入学）

shotakenta@yahoo.co.jp

64E 入学同窓会

はじめに

今から61年前、1964年（昭和39年）東京オリンピックの年に電気通信大学 電子工学科に入学した人数は確か44名でした。

1964年入学者総数は7学科約280名、全員男子のみで、女性はいませんでした。そして、四学年全学生数を合わせても、約1000名でした。電子工学科のクラスは、現役と、浪人の比率はそれぞれ半分ずつの50%、授業料は、1000円／月という安さ。学内には松の木や栗林などの緑が多かったです。

当時の電通大の進級は厳しく、特に必修科目の、英語（八木教授）と電磁気学（佐藤教授）の単位が3年までに取れないと4年生で卒業論文が取れず、結局卒業させてもらえませんでした。私も電磁気学で不可をとり、青くなりましたが、特別に実施された追試験でようやく合格した「苦い思い出」があります。

同窓会活動

2013年8月にドイツ在住の東條君（東條英機氏の孫）の計報の連絡があり、河面君の努力のおかげでその夏のうちにクラスの名簿がまとまり、調布市で電子工学科の同窓会を開催しました。しかし、その数か月後の12月に開催場

所等を担当された河野君（電通大教授）が同じ年の12月に突然亡くなられたのには驚きました。69歳という若さでした。

その後、2014年7月12日と、2015年7月18日にいずれも西新宿で河面君幹事のもと同窓会を実地しました。そして2017年6月6日・7日は、長野在住の大矢君企画により、国民宿舎松代荘に宿泊して善光寺、上田城等へ観光旅行をしました。その後コロナ禍の為、対面形式の同窓会は出来ず、ZOOM形式により2022年12月8日と、2023年3月に開催しました。クラスをまとめてくれていた幹事の河面君が2023年5月に亡くなれました。

その後対面による同窓会を、7年ぶりとなる、2024年5月（11名参加）に開催しました。そして今年7月1日（6名参加）、新宿にて開催しました。昔話に話がはずみ、3時間があっという間に経過してしまいました。又、来年に会おうと再会を誓い、お開きにしました。

終わりに

残念ながら、この一年で高崎君、伏木田君、宇田川君が、相次いで鬼籍に入られました。現役組も今年80歳（傘寿）となります。これからもぼけ防止を兼ねて元気なうちは同窓会活動を続けて行きます。

なお、今回初めて目黒会よりグループ会の補助金をいただき、活用させていただきました。

有り難うございました。

64E 入学同窓会（64年入学電子工学科の会）

幹事 小沼 博

（1964年 電子工学科入学）

幹事 篠原 力

（1964年 電子工学科入学）





新刊『日本のNMR（核磁気共鳴）、東西5つの源流』の紹介

深沢 武雄

1961年 電子工学科入学

電気通信大学黎明期、初代学長寺沢寛一先生、量子力学の神戸謙次郎先生支援のもと、藤原鎮男・林昭一両先生によって開発されたNMR（核磁気共鳴）磁石が、2019年4月、日本の化学遺産に認定されました。「日本初のNMR分光器用電磁石」としてでした。本書は、これを機に、同時代のNMR研究者であり、相対論的NMRの提唱者、中川直哉名誉教授（98）とともにNMRそのものの研究史のほか、日本のNMR開発の源流について調査して纏めた本です。あわせてNMRの延長線上に発展をとげてきたMRI（磁気共鳴画像）の研究史についても触れています。核磁気共鳴は19世紀初頭に端を発した核物理学研究の過程で進化を遂げてきた研究ですが、それが、現在、化学分析や医療画像診断に欠かせない「NMR分光器」として結実したのは、先の大戦中、日米で実施された科学動員の落とし子としてであったことがわかりました。戦勝国の米国では、1946年、ハーバード大学のEdward Mills Purcellが、MIT放射線研究所における軍用レーダー開発で得られたマイクロ波の知見をもとに、そして、スタンフォード大学のFelix Blochは、同じ時期、オッペンハイマーのマンハッタン計画で爆縮の研究を行った後、ハーバード大学電波研究所におけるレーダー開発で得られたラジオ波技術をもとに凝縮系の核磁気共鳴

の検出に世界で初めて成功し、1952年、両者ともノーベル物理学賞を授与されました。一方、敗戦国の日本では、1949年頃、科学動員で海軍技術研究所のレーダー開発から戻った大阪大学の伊藤順吉氏らが、研究室に残っていた鉄材を利用してNMR分光器の開発を始めました。同時に、東京目黒に開学したばかりの電気通信大学では、たまたま東京大学から赴任したばかりの藤原鎮男講師が、無線講習所出身の林昭一助手とともにほとんど自腹でNMR分光器の試作に成功していました。その経緯は、藤原先生が通勤電車の中で「最近、米国では電波で原子核を見るNMR、つまり核磁気共鳴というものが始まっている」と東大の学友から聞き、「それならば自分がやってきた高周波測定装置のようなものだ」と思ってその開発を大学に提言したのだとされています。藤原講師らの開発は、1951年、電通大のNMR第1号機として結実し、水素、フッ素、ナトリウム、コバルトの核磁気共鳴の他、 $K_3Co(CN)_6$ など複数化合物のケミカルシフトの観測までも成功しました。そして、その成果が『電気通信大学学報第3号（1951.12.8）』に発表されると、全国から研究者が電通大に集まりだし、NMR勉強会が定期的に開かれ、その延長線上に、1981年、「日本核磁気共鳴学会」が創設されたのでした。

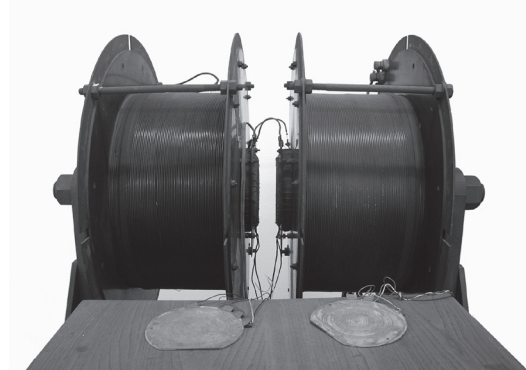


写真1：2019年、日本化学会によって「日本の化学遺産」に認定された電気通信大学NMR第1号機の電磁石



写真2：中川直哉監修、深沢武雄著『日本のNMR（核磁気共鳴）東西5つの源流』（テクネ出版、2025）





同行援護従業者（視覚障害者ガイドヘルパー）の紹介

水戸 和幸

1995年 電子情報学科編入学

資格名：同行援護従業者

認定機関名：社会福祉法人調布市社会福祉協議会

取得日：令和4年10月29日

資格の概要：視覚障害者の外出に伴う移動時の支援（代読・代筆、移動介助、排せつ介助、食事介助）

■資格取得のきっかけ

趣味のマラソンの延長として令和2年よりブラインドランナーの伴走をしています。また、大学教員として、視覚障害者への情報伝達支援に関する研究をしており、伴走だけでなく日常的な移動支援における新たな知識や経験を得たいと思ったのが資格取得のきっかけとなっています。

■資格取得で苦労した点

本資格は、都道府県や市町村が指定した機関（日本視覚障害者団体連合、社会福祉協議会など）が実施する「同行援護従業者養成研修」を修了することで取得できます。よって、基本的には試験が無く、研修を受講すれば取得できる資格であるため難易度は高くありません。私の場合、調布市社会福祉協議会が実施する同研修を修了して資格を取得しましたが、苦労したのはスケジュール調整です。研修は講義主体の一般課程（4日間）と実技主体の応用課程（2日間）に分かれており、平日の日中に行われる為、仕事の調整と年次休暇を使って受講しました。

■資格取得後、良かった点

資格取得後に良かった点は、視覚障害者の外出をサポートすることで、その方の「外出したい」という気持ちを叶えるとともに、社会とのつながりを広げる一助になっている点です。視覚障害者の外出する理由は、通院、買い物、スポーツ、機能訓練と様々です。買い物の場合、商品の価格はもちろん、色、形、機能性の有無など視覚障害者が

知りたい商品情報を詳細に、正確に伝える必要があります。場合によっては、品物に触れてもらい質感、形、大きさなどを確認してもらいます。また、食品の場合は、賞味期限、消費期限、原材料などの文字情報も必要に応じて代読します。また、特売品、新商品、流行りの商品であることも等々伝えることがあります。先日も「この間、教えてもらった新商品のお菓子が美味しかった」と言って貰え、うれしい気持ちになりました。

また、外出のサポートを通じて、日常生活の中での困りごとを知ることが出来るので、自身の研究を進める上でも大変参考になります。

■資格取得を目指す方へのアドバイス

この資格は研修を修了するだけで取得できます。必要なのは、視覚障害者のために協力したいという気持ちだと思います。視覚障害は、情報障害とも言われ、情報取得の障害があるために移動に不自由を感じてしまいます。視覚障害者の必要とする情報を適切な言葉がけで正しく伝え、滞りなく目的を果たす事に協力することは、視覚障害者の生活や社会参加を支える大切な役目と考えます。



メッセージ

(近況報告)

【趣味】吉清治夫 1961 電子工学科

地元の絵の同好会に所属し、水彩画を描いています。月2度の例会のうち1回は講師による講評を受けます。また、土曜で暑くない日にはテニスクラブでダブルスを1試合プレーしています。

【近況】中山 明 1981 情報数理工学専攻

令和7年3月末に福島大学の研究室を退去しました。引き続き、4月から同大学の非常勤講師として6科目の授業を担当しており、週3日ほど大学へ出向いています。加えて、私的な研究会や学会活動等もあり結構忙しくしております。研究分野は応用数学、特に、グラフやネットワーク内の組合せ最適化です。実は、学部時代は他大学の理学部応用数学科に所属し、電気通信大学には修士課程のみ在籍しました。最近、数学を学び直したい、証明の論理展開をきちんと復習したいという欲求が出てきました。現在、ルベグ積分、スティルチェス積分、確率積分等の各種積分に関する諸定理をその証明とともにじっくり学習しています。これまでしっかり取り組めていなかった内容も多々あり、日々、このような活動に時間を費やしています。

【仕事】中村 亮 2019 学域Ⅲ類

今年度から新社会人となり、鉄鋼メーカーで耐火物関係の部署に所属しています。耐火物とは製鉄を行う際に溶けた鉄から設備を守る材料のことで、これがなくては大規模な製鉄を行うことはできないほどの重要な材料になっています。現在はいくつかのメーカーから提供された耐火物の比較評価を行うというテーマで研修を受けています。電通大の先輩方に恥じぬよう、また後輩たちに誇れるよう、今後技術者として成長を目指します。

もっと多くの同窓生の「今」を知りたい。
そんな思いから設けたコーナーです。

* 学科の年表記は入学年です。



【仕事】大家万明 1973 電波通信学科

電通大の理事（国際・広報担当）を務めて早いものでもう4年になりました。目黒会同窓生の皆さんには、コミュニケーションミュージアムの学術調査員や寄付へのご支援、海外からのサポート等含めて、大変お世話になり感謝しております。70歳を超えての毎日の出勤や時々ある海外出張はそれなりに堪えますが、母校の為に少しは役に立っているかもということも励みになって頑張っています。今年度末には、コミュニケーションミュージアムの新館が完成の予定ですので、春頃に是非母校をお訪ねください。本館にもお立ち寄り頂ければ嬉しいです。

【近況】中村哲哉 1980 応用電子工学科

6年前、会社が経営難に陥り早期退職者を募集しました。当時59歳で、翌年定年退職してあと5年間、再雇用で会社に残るか、割増し退職金をもらって早期退職するか検討した結果、組織を離れて経済的に自立しようと思い、後者を選びました。現在は投資の世界で活動しています。きちんと利益を出す必要があるため、会社経営しているような感覚でいます。これからもこの第2の人生を、しっかり歩んでいこうと思います。

※以下のような「お便り」は掲載できませんので、あらかじめご了承ください。

●会員個人の近況報告に関する文章表現になっていないもの ●社会規範、公序良俗に反するもの ●他人の権利を侵害し、または他人の迷惑となるもの ●広告にあたるもの ●その他、目黒会広報委員会が不適切と判断したもの

メールアドレス登録のご案内

目黒会では更なる同窓生サービスの向上を目指し、下記の情報を電子メールでお届けしています。

- ・大学の最新イベント情報（ホームカミングデー、STF、調布祭など）
- ・お住いの地域の目黒会支部活動情報（総会、交流会のご案内など）
- ・グループ会、サークル・研究室同窓会情報
- ・大学・目黒会の最新トピックス など

皆様のお役に立つ最新情報をタイムリーにお届けします。

この機会に目黒会ホームページから登録をお願いいたします。
https://megurokai.jp/home2/change/e-mail_reg_form/



目黒会グループ会のご案内

P34～P37の
グループ会情報も
ご覧ください！

電気通信大学卒業生の多くの皆様がグループの活動を通じて同窓生同士の交流を深める活動をされています。そこで、目黒会では「目黒会グループ会」という連携組織を設けることで、グループとの情報交流を深めて参ります。活動されている皆様は、是非ともグループ会への登録をお願い申し上げます。

1. 目黒会グループ会への参加要領

- （参加条件）①グループ会の代表者は目黒会正会員であること。
その他の条件は目黒会ホームページをご参照ください。
グループ会登録は随時受け付けています。



2. 目黒会グループ会のグループ参加メリット

- ①正会員7名以上のグループ会へ活動補助金（年1回上限2万円）を交付します。
活動補助金の交付にあたっては2月末までに活動報告書（登録後の活動が対象）と領収書（原本）の提出が必要です。事務局では報告書の内容を確認し、審査した上、3月中に活動補助金を交付します。
- ②目黒会同窓会誌にグループ活動紹介を載せてグループの広報宣伝に協力いたします。

〈お問い合わせ窓口〉

目黒会グループ会窓口：目黒会事務局

E-mail：info@megurokai.jp <https://megurokai.jp/home2/>

トピックス

『桜・花火お祭り大賞』 報告

同窓生の皆様の交流を図るため、同窓生交流サイト『同窓会ラウンジ』のギャラリー欄を活用して、一年間を通してシーズン毎の地元の行事等を写真でご投稿いただく企画を2023年度から実施しています。2025年度上期に実施したシーズン毎の大賞をご報告いたします。

ギャラリー



(1) 桜大賞2025

2025年度のご当地企画第1弾として「桜」の写真を2025年3月10日～5月20日の期間内に募集したところ、同窓生の皆様から35作品のご投稿をいただき、7作品が桜大賞に選出されました。

桜大賞カラー表示



作品名：河津桜と富士の山

作者：田中 健司（2015 情報理工学研究科 知能機械工学専攻入学）

作品紹介：神奈川県松田町にある西平畑公園に植えられた河津桜と富士山のコラボレーションです。山の斜面に河津桜が植えられ、満開になったときの美しさと、富士山、松田町の市街地を望む風景は見事です。



作品名：野川の夜桜

作者：小高 優（1977 通信工学科入学）

作品紹介：先日偶然、その日限定で毎年恒例の野川沿いの桜をライトアップするイベントがあることを知り、帰宅してから妻を誘って初めて見物に行きました。当日は人混みがすごく、バス道路も会場に近づくにつれて渋滞、民間の整理員に加えて警察官もたくさん出て誘導してくれました。主催者、整理の方々に感謝。多数の観客が夜桜を堪能しました。



作品名：万博記念公園の桜

作者：田中 治彦（1971 経営工学科入学）

作品紹介：大阪府吹田市にある万博記念公園で鳥と一緒に撮った桜です。



作品名：大俵桜

作者：香川 八束（1963 短大通信科入学）

作品紹介：大俵桜は里山で2011年に発見されました、場所は市原市迎田407に凡そ150年の樹齢の山桜です。帝京大学病院通りからの入り口は見逃しやすいのでゆっくり見ながら走ってください。この里山を愛する会は常に地域を大事に手入れして他の花々も綺麗です。



作品名：国道194号線沿いの桜

作者：伊藤 正顕（1980 材料科学科入学）

作品紹介：愛媛県西条市から高知県高知市に至る国道194号線の愛媛県側西条市千町地区の加茂川沿いに、約1キロメートルに及ぶ桜並木が続いている所があります。車を走らせながら、時には下車して桜の鑑賞が楽しめるタウン情報雑誌には掲載されていない隠れた桜の名所です。目黒会四国支部、特に愛媛・高知県出身の方、ドライブがてらにどうでしょうか。



作品名：井の頭公園その3

作者：片井野 洋士（1988 電子物性工学科入学）

作品紹介：桜とボートのコラボレーションの一枚です。



作品名：高田城址公園と水面の桜

作者：梶川 光一（2016 情報理工学域入学）

作品紹介：新潟県上越市高田城址公園の桜日本3大夜桜と謳われる名所です。

(2) 花火お祭り大賞2025

2025年度のご当地企画第2弾として「花火お祭り」の写真を2025年8月1日～9月28日の期間内に募集したところ、同窓生の皆様から9作品のご投稿をいただき、3作品が花火お祭り大賞に選出されました。

花火お祭り大賞カラー表示



作品名：エスコンフィールド北海道超花火大会
作者：前谷 典弘（1991電子情報学科編入学）
作品紹介：隣接する北広島高校の生徒さんが企画した花火もあります。音楽と映像、花火の光と音の共演は感動です。



作品名：彩色孔雀千輪
作者：佐々木 一夢（2015 先進理工学科入学）
作品紹介：三重県にある漁村で行われるお祭りの花火です。地元の花火師が打ち上げる大掛かりで美しい花火に全国から人が集まります。撮影はハードですがその分見られた時の感動は素晴らしいものです。



作品名：第51回金沢まつり花火大会-その3
作者：村島 崇（1981 電波通信学科入学）
作品紹介：8月30日に横浜市金沢区の海の公園で開催された第51回金沢まつり花火大会の花火です。

会員サービスのご案内

図書館利用証発行サービス

電気通信大学附属図書館への入退館ができる利用証発行サービスです。(利用証を使用することで入退館の際に手続不要で利用できます。)なお、図書の貸し出しは出来ません。
(<https://megurokai.jp/home2/> 図書館利用証発行/)



クラス会開催連絡サービス

懐かしい仲間と集いたい同窓生向けのサービスです。同窓会ラウンジの「楽しむ/予定」に投稿し、このサービスを希望すると目黒会から対象同窓生に開催をお知らせします。クラス会開催日及び場所が決まっていなくても利用できます。連絡サービスを希望される場合は、クラス会開催日の一か月前までに投稿をお願いします。
(<https://megurokai.jp/home2/> クラス会開催連絡サービス/)



結婚式お祝いメッセージサービス

ご本人の依頼によって目黒会から結婚式お祝いメッセージをお届けするサービスです。挙式(お届け希望日)の2週間前までに申し込みください。
(<https://megurokai.jp/home2/> 結婚式お祝いメッセージサービス/)



長寿お祝いメッセージサービス

古希(70歳)、喜寿(77歳)、米寿(88歳)を迎えられる同窓生に長寿お祝いメッセージを敬老の日にお届けするサービスです。
(<https://megurokai.jp/home2/> 長寿お祝いメッセージサービス/)



ご利用を心よりお待ちしております。

お問い合わせ窓口

目黒会事務局

E-mail : service@megurokai.jp <https://megurokai.jp/home2/>

電気通信大学同窓会賞候補者推薦のご案内

あなたの友人、知人の電通大卒業生で
是非この人に電気通信大学同窓会賞を贈りたいという方はいらっしゃいませんか？
現在、同窓会賞候補者を募集しております。以下に募集内容の詳細を記載します。



電気通信大学同窓会賞とは

電通大の卒業生で、

- ・科学技術の発展に顕著な業績を挙げた人
- ・社会の各方面で活躍し顕著な業績を挙げた人

を表彰します。

同窓会賞受賞者は、4月に行われる電通大情報理工学域の入学式終了後、目黒会長から表彰され、新入生に対して業績紹介の講演を行います。

最近の受賞者

隅田 英一郎氏 国立研究開発法人情報通信研究機構 フェロー

○音声翻訳の第一人者として多言語翻訳技術の高度化と社会実装の更なる進展に向けて大きく社会に貢献

同窓会賞候補者（他薦のみ）を募集しています。是非、受賞にふさわしい卒業生をご推薦下さい。なお、推薦者は正会員に限ります。

締切は2025年12月15日（月）です。

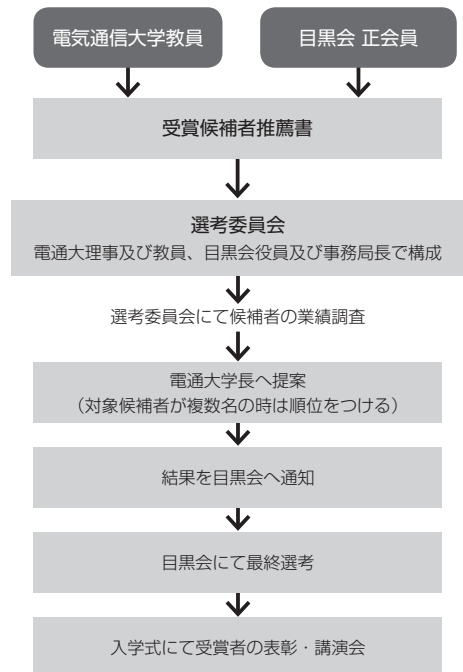
推薦書を目黒会ホームページからダウンロードし、

目黒会事務局までメール添付にてご連絡下さい。

目黒会ホームページ: <https://megurokai.jp/home2/>

メールアドレス: info@megurokai.jp

同窓会賞の決定フロー



2025年電気通信大学同窓会賞受賞者



梶谷 誠氏

1964年 電気通信大学電気通信学部
通信機械工学科卒業
電気通信大学学長顧問

梶谷氏は、2000年及び2008年に電気通信大学長に任命され、2014年退任後は学長顧問として本学の発展に尽力されています。

また、超精密自動校正システムは日本のロータリエンコーダの校正標準となり、演算式歯形測定機は世界の標準的方式となるなど、氏の研究開発の先見性は高く、国内外の工業界の発展に多大な功績を挙げました。



津田 邦和氏

1978年 電気通信大学電気通信学部
経営工学科卒業
NCRI株式会社 会長

津田氏は、日本のクラウドサービスの黎明期から現在に至るまで研究開発・ビジネス創出と人材育成に重要な貢献をされ、「日本のクラウドの父」とも称されています。

また、スマートフォンとクラウドを活用したビジネスの創出と普及を推進するとともに、再生エネルギー活用データのセンターエネルギー消費低減技術の研究に大きく貢献されてきました。

編集後記

今号の特集は『電気通信大学における「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS事業）」の取り組み』を取り上げました。戦略的に研究拠点力の強化を狙うUEC・SHIPプログラムも始まっています。是非ご注目ください。このプロジェクトの核となるイーネクス棟は既に完成し、電通大の新しい姿を期待させます。

ユニーク&エキサイティング・キャリア編では今回もユニークなキャリアを歩まれた卒業生が登場されています。古林利明さんは電機メーカーから若くして翻訳者に転じられた後、五十代半ばでゼロからワイン造りを始め、現在ワイナリーを経営されています。渡辺修司さんはゲームプランナーとして長く活躍され、現在は立命館大学ゲーム研究センター長としてゲームを通じた人間の遊びの本質を探究されています。お二人とも電通大で学んだ探究心や環境が後のキャリアにつながっています。

現役2年生の中野湧さんが7月にブラジルで開催された国際ロボット競技大会に出場されたのはビッグニュースでした。トピックスでその奮闘の様子をお伝えしています。

さて、今後の本誌の表紙作成の参考とするため「同窓会誌表紙コンテスト」を始めました。案内をご覧の上、ぜひ投票をお願いいたします。その際あわせて本誌に対するご感想もお寄せ頂ければ幸いです。お待ちしております。

広報委員会 委員長 高橋真之

会費納入のご案内



目黒会の諸活動は皆様の会費によって運営しております。

皆様から納入いただいた会費をもとに①社会貢献、②大学支援、③親交・親睦に関する諸活動を展開しています。

同窓会誌2023-2号より赤色の払込取扱票は、会費納入時期となりました同窓生の方の宛名台紙にお付けしております。会費納入にご協力をお願い申し上げます。

会費納入時期に関するお問い合わせはinfo@megurokai.jpまでお願いいたします。

会費は、年額3,000円、お得な5年分一括払い13,000円、10年分一括払い24,000円があります。PayPalからも送金可能です。（詳細は<https://megurokai.jp/home2/member/>）銀行振込の場合は、次の銀行口座で可能ですが、振込手数料は送金者負担になります。

三菱UFJ銀行 調布支店 普通1535011 シャ)メグロカイ

銀行振込後、目黒会公式サイトの会費納入方法内の「お振込み情報フォーム」から振込情報をお知らせください。

電気通信大学同窓会

一般社団法人 目黒会

〒182-0021 東京都調布市調布ヶ丘1-5-1 電気通信大学内

TEL:042-482-3812 FAX:042-482-3845

E-mail: info@megurokai.jp

発行日 2025年11月25日

発行人 目黒会

編集人 高橋真之

※本誌の記事を無断で転載することを禁じます。

広報委員会委員名

委員長 高橋 真之

副委員長 中里 明子

委員

横川 慎二

島崎 俊介

宮本久仁男（アドバイザー）

宮坂 純（事務局）

宮本 美則（事務局長）

（2025年9月現在）

目黒会・広報委員会、本誌へのご意見・ご要望をお寄せください。

読者プレゼント

愛読者への
プレゼント

同窓会誌 表紙コンテスト

同窓会誌のアーカイブ(23-1号～2025-2号の計29冊)をご覧ください、一番気に入った表紙の巻号と投票者氏名、入学年、学域・学部名、住所、メールアドレスを投票フォームから入力をお願いします。

同窓会誌アーカイブ

<https://megurokai.jp/lounge/category/magazine/>



投票フォーム

https://megurokai.jp/home2/2025cover_contest_vote/



投票締切： 2025年12月24日(水)



投票結果は12月26日(金)に
ホームページに上位3件を
掲載いたします

投票いただいた
卒業生の中から
抽選で10名様に
記念品をプレ
ゼント